

法政大学

EToS

2020 vol.4

4

江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies



表紙図版の出典(上から):

- 「天保江戸大地図(1843年)」国立国会図書館
- 「国土地理院航空写真(2017年)」国土地理院
- この地図は、(一財)日本地図センターが刊行した「参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京測量原図」のうち「新宿区市ヶ谷付近」を使用しました。
- 「ソリッド・ボイド・マップ(2018年)」法政大学北山研究室製作

目次

マニフェスト	3
新・江戸東京研究の理論化を目指して	4
江戸東京研究センター長、法政大学デザイン工学部教授 高村雅彦	
5つの研究プロジェクト	
① 水都一基層構造	6
② 江戸東京の「ユニークさ」	8
③ テクノロジーとアート	10
④ 都市東京の近未来	12
⑤ 江戸東京アトラス	14
2020年度事業報告	
シンポジウム・研究会	
研究会「東京の京友禅」	16
シンポジウム「気候変動と雨水利用～雨水の基準と制度を考える日独シンポジウム」	17
研究会「考古民族国際研究センター「Edo Castle Mission」との研究会」	18
シンポジウム「2019年度江戸東京研究センター年度末報告会」	19
研究会「佐原アカデミアとの研究交流会議」	20
国際シンポジウム「都市・自然・人間」	20
研究成果「中世武蔵国絵図」	22
研究会「米国写真アーカイブスでたどる占領期の東京」	23
研究会「東京の新名所「史蹟と銭湯」」	24
特別講義「神谷博 法政大学退任記念特別講義」	25
第11回外濠市民塾「『外濠BAR』おぼんカウンター作成」	25
シンポジウム「パブリックアートと東京」	26
シンポジウム「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」	28
研究会「江戸東京アトラス研究ワークショップ」	30
学内外・地域活動	
課外教養プログラム「先人は凄かった！総長と学ぶ江戸ロジエ」／講義「東京MAP」の作成／プロジェクト「東京発掘プロジェクト 水辺編」／講義「フィールドワーク」／講義「都市史」	33
著書・論文・その他	34
メンバー	40

持続可能な地球社会の実現に向け、
近代のパラダイムを超えた
都市の未来を考えるために、
私たちは、新・江戸東京研究に挑戦します。

As we head towards the reality of
sustainable global communities,
we rise to the challenge of New Edo-Tokyo Studies
in considering the future of the city free
from the modern-era paradigm.

江戸東京研究センターは、江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を構築するための方法と理論とを導き出し、その知見を地球社会の諸課題を解決する〈実践知〉として育み広める教育研究拠点です。

The Research Center for Edo-Tokyo Studies unearths and reevaluates the nature, history, culture and human resources that have accumulated in Edo-Tokyo and live on today, and in so doing clarifies the reasons why the city has endured culturally and spatially, and derives from them a method and theory for constructing sustainable global communities. It is a learning research base where that wisdom is nurtured and widened into a “practical wisdom” for solving the various issues of global communities.

新・江戸東京研究の理論化を目指して

江戸東京研究センター長、法政大学デザイン工学部教授

高村雅彦

2020年は新型肺炎のコロナに始まりコロナに終わる。誰もがそう感じたこの1年であって、オリンピックや東京ビエンナーレなど国と地域の各種イベントが延期や中止に追い込まれるなか、われわれの江戸東京センターが計画していたさまざまな行事や活動もまた同じ対応を取らざるを得ないのかと当初は悩んでいました。でも、知らなかったIT技術を徐々に身に着け、オンラインによる対話や表現が可能であることを知り、しだいにそれに慣れてくる夏以降になると、むしろ空間の隔たりや移動の時間を気にせず、気軽にシンポジウム、研究会、打合せができるようになって、例年とほぼ変わらない活動が展開できました。

詳細は「シンポジウム・研究会」のページを参照していただくとして、9月以降に研究会3回、国際シンポジウム1回、国内シンポジウム1回、学内外の講義・プログラムを2回開催し、いまこの文章を書いている段階までにも実に多くの研究活動をおこないました。そして、2021年の3月までに、一つの国際シンポジウムと四つの研究会をさらに予定しています。

2017年初冬のセンター設立以来、研究員とスタッフが一丸となって不断の活動を続けています。四年目の2020年度は、当初目標に掲げた国際的な情報の発信と交流の促進と

いう点でも、1月のヴェネツィアを含めれば、10月の日中韓、2021年2月の日韓の3度にわたる国際シンポジウムを開催し大きな成果をあげることができました。とくに、文系の国際日本学研究所と理系のエコ地域デザイン研究センターが合わさって設立された当センターの強みを生かして、各種研究活動のみならず、すべてのシンポジウムと研究会において一堂に会して議論することにより、一つの対象を歴史や美術の社会的な観点と建築や地理の空間的観点の両面から立体的に解明していくことを追求していて、この体制は今後もより強固に継続していきます。

そして、この2020年度を飛躍の年とし、われわれは5年目となる2021年度を一つの区切りとして大きなまとめの作業に取り掛かろうとしています。1980年代のいわゆる〈江戸東京学〉からとり残された課題は何か、その枠組みを超え、より深く大きく江戸東京の特質を解明するための対象や方法はいかなるものか。文理融合にありがちな多様な研究テーマや学問分野を細分化したままにはせず、いかに統合し理論化しうるか。そのためのいくつかの視点がいまあぶりだされつつあります。これらはいずれも異なる分野の研究者が一緒になって活動したからこそ発想されたものばかりです。①二項

対立ではない有機的なつながりとしての都市と田園の関係、②それに対する文化的景観の有効性、③モニュメントではない名所という概念・カテゴリーの組み立て、④歴史・文化的アイデンティティの実態と継承の方法、⑤バーチャルとリアリズムによる表現の自由、⑥地形などの自然条件と古代中世という都市の基層への着目、⑦場所・空間・環境を一体にとらえる考え方、⑧人間と社会が作り出す様々な都市とスケールの関係の把握と効果。これら江戸東京の特質を社会と空間の両面からを解明し、〈新・江戸東京研究〉の理論化を目指します。そのための多様な人々が結びつき、交流し、ともに創造する場としての拠点が江戸東京研究センターなのです。

いま、日本を含む先進国を中心に急激な人口減少と高齢化社会の到来を迎え、これまでの高度成長型の開発志向が強い都市の在り方に関しては、価値観の大きな転換が必要となっています。しかも、地球規模での環境問題に加え、近年の自然災害の多発や今般のコロナウィルスによる疫病に対する人類の姿勢が問われています。東日本大震災などの自然災害や今般の新型肺炎の蔓延では、人命を第一に考えることは当然であっても、技術や経済の力を過信し徹底的に抑え込もうとした20世紀とは異なる思考が求められているので

す。想定外の困難に遭遇しても、それを力づくで解決しようとするには限界があることを知り、むしろそうした考え方自体が何か違うのではないかと自覚することが重要です。

山本太郎は近著『疫病と人類——新しい感染症の時代をどう生きるか』（朝日新書）のなかで、近年の加速度的に登場する新たな感染症は、グローバル化による人口の増加や生態系への無秩序な進出とけっして無関係ではないと指摘します。人類は過去にパンデミックを起こした感染症をうまく取り込み、免疫を獲得し、「種」としての強靭さを養ってきたのであって、それは「撲滅すべき悪」ではけっしてなく、むしろ新たな近接関係を獲得して、柔軟性あるしなやかな社会をどう構築していくべきかのほうが重要であると説いています。

われわれのセンターも、多様な研究活動を通して、都市の歴史、そして人類史の長期的な見通しを考え続けることを使命とし、世界の持続的な発展に貢献できるその可能性を探ることを大きな目標としています。

1

Project 1

水都一基層構造

水のテリトリーオの国際比較

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー 高村雅彦

本プロジェクトは、江戸東京が長く生き続けるその理由と意味を解き明かすために、これまであまり注目されてこなかった古代・中世から綿々とつながる大地や自然と結びついた都市と地域の基層構造の解明を水との関係に着目し追求しています。

前年度は水都の基層構造の研究を深めるために、都市と地域の領域、いわゆるテリトリーオと文化的景観に焦点をあてて研究を進めました。これまでの研究で、江戸東京のいわゆる中心部だけでなく、対象の範囲をより広くとらえ、同時に近世以前の古代や中世を含めて考察しなければならないということが明らかになりつつあります。江戸市域に限定せず、その繁栄を支えた後背地や近郊農村をつなげて分析する方法を用い、同時に古代・中世の地形や自然環境との関係を探りながら、江戸東京の全体を水と地域形成の観点から再読することを目指しています。

まず、前年度に続いて、エコ地域デザイン研究センターと共催で2020年9月16日にはテリトリーオ研究会による「イタリア農業の底力」を開催し、地形や地質とそのうえに成り立つ人々の営みの関係について密接な結びつきがあることを改めて確認しました。また、前年度のシンポジウム「古代・中

世の府中から武蔵国を探る」、「御嶽山で語る畠山重忠 ～父と娘 玉川が紡ぐ魂の邂逅～」、「玉川の語源を探る夕べ」をまとめるかたちで、2020年10月には江戸の基層研究の一翼を担う神谷博を中心とする府中玉川プロジェクトの手により「中世武蔵国絵図」を製作しました。この絵図は好評を得て在庫がすぐになくなったため、現在は当研究センターのホームページ上にデータを公開しています。同時に、「多摩川源流物語」と題した動画も作成してYoutube上で公開しています。

前年度末のイベントになりますが、2020年2月26日には、イタリアのThe International Research Institute for Archaeology and Ethnologyから、代表のDaniele Petrella氏と副代表のVittorio Lauro氏を招いて講演会を開催し、世界各地の歴史的文化遺産を高度なCG技術で復元する方法と事例を紹介してもらいました。彼らとの共同による内堀を含む江戸城（皇居）の復元を目的として、研究交流の覚書を締結しましたが、コロナによる渡航の制限により、共同での現地調査ができなくなって活動は延期となっています。今後、研究費の獲得や行政からの許可を得て、近い将来、江戸城の復元CGを作成する予定です。



Photo by Hiroshi Aoki

高村雅彦

1964年生まれ。専門はアジア都市史・建築史。法政大学大学院博士課程修了。博士（工学）。前田工学賞、建築史学会賞を受賞。編著に『タイの水辺都市 天使の都を中心に（水と〈まち〉の物語）』法政大学出版局（2011）、『中国江南の都市とくらし 水のまちの環境形成』山川出版社（2000）などがある。

さらに、本プロジェクトが一貫して取り組んでいる「東京発掘プロジェクト水辺編」は今年で3年目を迎えました。今年もスリバチ学会会長で、本センターの研究員でもある皆川典久を中心に、大学院生によって東京の水辺を歴史的に調査研究し、それを読み込んだうえで、現代の都市にあってどのように再生するかをデザインする報告書を製作中です。それに加えて、本年度は、高村雅彦がリーダーとなり、50名あまりの大学院生に呼び掛けて、江戸東京の上水と水車に関する研究を開始しました。玉川上水とその支流となる野火止上水、千川上水、三田用水を対象に、古地図を用いて水車の位置をプロットし、その動力が近代東京の幕開けを担ったのではないかという仮説に全員で取り組んでいます。コロナの影響で現地調査ができませんでしたが、本年度の資料中心の考察結果と合わせて、2021年度にはフィールドワークを実施し、その2年にわたる成果を報告書として発行します。

そして、2020年度の成果として特筆すべきなのは、陣内秀信が東京の水都に関するきわめて意義深い『水都東京—地形と歴史で読みとく下町・山の手・郊外』（ちくま新書）を上梓したことです。陣内秀信の東京研究を世に知らしめた1985年の『東京の空間人類学』（筑摩書房）から35年を経て、

内の東京論の集大成ともいえるものです。この間も東京について様々な論考を提示してきましたが、今回はその総論ともいべきもので、従来の都心や下町だけを「水の都市」とする枠組みを超えて、山の手や武蔵野、さらには多摩へと対象を広げ、東京全体を水との密接な関係なのかで多角的に解説しています。台地や丘からなる緑溢れる「田園都市」としての山の手に対し、河川と堀割が網目状に巡るヴェネツィアのような「水の都市」としての下町が併存するというこれまでの論考を大きく飛躍させ、東京は山の手のみならず郊外においても「水都」と呼べる大きく豊かな水の広がりを持つ都市であることを明らかにしています。ここでも、本プロジェクトの主旨と同じく、地形や自然といった基層から人々の営為が生じる場であるさまざまな地域を読み解くといった方法論は一貫して、そこから都市の現在を語ろうとする立場にも変化はありません。江戸東京研究センターの活動を牽引しつつ、同時に水都に関する調査研究を終始推し進め、それを広く公表して価値を共有しようとする陣内秀信のその姿勢は、一般の人々だけでなく、センターのわれわれにとっても常に大きな刺激となっています。

②

Project 2

江戸東京の「ユニークさ」

東京のアイデンティティーとしての江戸とは

法政大学文学部教授、プロジェクトリーダー 小林ふみ子

活動に制約の大きかった本年度は、これまでの研究成果をまとめ、新たな展開を模索しはじめる年となった。

まず6月に『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』を刊行した。一昨年度末に実施したシンポジウム「追憶のなかの江戸～江戸は人びとの記憶のなかでどのような都市として再構成されたのか」をもとに、当日の発表を発展させた諸論考に、いくつかの章やコラムを補った論集である。17世紀の新興都市江戸はもともと、京都に比べ、都市としての歴史が浅い。そのうえ、たび重なる火災や自然災害によって失われたものが多く、とりわけ幕末の大地震、さらに明治以降の急速な近代化、関東大震災、そして戦災によって外観の変化が著しかったことは周知の事実であろう。そのような状況下で、おのずとこの都市から失われた過去の事物を再発見し、記録し、さらに文芸作品などのかたちで再構成する営みが早くからみられるようになる。本書においてはその先駆けといえるものがみだせる18世紀から20世紀なかばまでを視野に、おもに文学者たちが江戸に向けたまなざしの系譜をたどった。そこでみえてきたことは、残された資料を探索し、いわゆる大文字の歴史だけでなく、細かな地名の由来や日常的な習俗、芸能民や物売りの姿など、とるにたりないと思われがち

な事象までも対象に、この都市のかつての姿を探ろうとする好古の文事が行われたことであった。しかもそれが19世紀に入る頃には文人・好事家たちがネットワークを形成するかたちで広く共有されるようになり、明治期にいたるまで行われた。その発想と方法は、近代文学の作家たちによってかたちと色合いを変えて継承ないし利用されることになる。限られた有形の遺産を探究して微に入り細に入り事実を解明し、そこから無形の記憶も総合し、想像力を駆使して都市像を描きだす。江戸東京のアイデンティティはこのようにして紡ぎだされたという視角を提示し得た。

歴史が短く有形の遺産に限られたことに由来すると考えられるこうした江戸東京の特性は、今後、国内外の他都市と比較しながら検証すべきことであろう。京都・大阪と比較という点では、米家志乃布による昨年7月のシンポジウム報告（→「近代の名所図会にみる江戸イメージ」『法政地理』第52号、2020年）が示唆的であった。明治期の同種の媒体における東京と京都・大阪の表象を比較すると、歴史の長い関西の2都市においては、東京ほど過去を強調する構成になっていないというその指摘は、東京を語るうえで「江戸」がいかに重視されたかという本書の知見を裏付けるものといえる。



小林ふみ子

1973年生まれ。専門は日本近世文学、文化。とくに江戸狂歌・戯作・浮世絵。東京大学大学院博士課程修了。博士（文学）。著書に『へんちくりん江戸挿絵本』集英社インターナショナル（2019）、『大田南畝江戸に狂歌の花咲かす』岩波書店（2014）などがある。

10月に開催した研究会「東京の新名所 史蹟と銭湯」によって、これまで行ってきた名所研究は現代までを視野に収めるに至った。古代の和歌的な想像力から生まれた歌枕を濫觴として、“見るべき”名のある地として近世から多様に発達した「名所」は“見るべき”という意味合いもさまざまに変化して現代に至る。寺社や行楽地などの近世以来の名所に加え、欧化の象徴的事物、出来事の記憶の地、またそれを視覚化した記念碑や像などへと多様化し、近年ではサブカルチャーゆかりの地なども新たに加わってきていることを確認してきた。この研究会によって、さらに学術調査によって認定された古代以来の史跡、著名人の墓所や旧居などもそれに数えられること、それに対する行政の関与という視点が提示されるとともに、銭湯などの古建築のように保存すべき対象として新たに認識されるようになったものも同様に考えられること、それは市民の手でその機運を作りだし得ることが示された。ここまでの過程で、「名所」とは、それぞれの時代に人びとが意味や物語を見いだすことができる場や事物であったということがみえてくる。これを逆手にとれば、いかに物語性を再発見ないし創造・付与し、訪れることに意味を感じさせる場にできるかが、これからの「名所」を考えるうえで鍵となると

ということが浮かびあがる。

江戸東京の「ユニークさ」を考えるうえで、やはり比較の視点は欠かせない。上述の国内の歴史ある都市との比較のほか EToS 全体のプロジェクトとしてヴェネツィアとの比較研究の成果が出つつある。そのなかで本プロジェクトとしては、本年度開催された国際シンポジウム「都市・自然・人間」の問題意識ともかかわって、東アジア域内で、同じく国内の中心都市として近世以来発達した、李氏朝鮮の都漢城を選び、生活文化の比較研究を開始した。現状では朝鮮文化史の研究者との共同研究は難しいと判断し、18-19世紀の漢城の文化や生活の諸要素について記した文献に基づいて、その記述と江戸東京についての諸文献にみえる事象との比較を行っている。詳細は当該シンポジウム報告のページに記すが、同じく中国文明の影響下にある2都市には共通点も多いいっぽうで、みえてきたさまざまな相違について、今後、中国も視野に入れて研究を深めたい。

3

Project 3

テクノロジーとアート

アートと写真の公共性

法政大学経済学部教授、プロジェクトリーダー 山本真鳥

コロナ禍の中、まともに研究会活動もできず、大変苦しい時期を過ごしたが、後期に入り、オンラインで研究会等を行うようになって、ようやく活動が多少なりともできる体制となってきた。アートとして写真を取り上げたいという希望があり、とりあえず2回写真に関連した研究会を企画し、映画・アニメに関するシンポジウムも開催を検討している。

11月20日(金) 18:00~19:30には、オンライン(Zoom)にて、「米国写真アーカイブスでたどる占領期の東京」が開催された。発表者は佐藤洋一氏(早稲田大学社会科学総合学術院教授)であり、コメンテータには渡邊英徳氏(東京大学大学院情報学環教授)を迎えた。参加者は74人である。終戦直後の米国進駐軍は、公的(軍関係)にも私的(各個人)にも多くの写真を撮影している。日本人自身の撮影が限られていた時代であったが、これらの写真は米国に持ち帰られ、公的な撮影資料に関しては公文書館に、また個人が撮影した写真は大学図書館や各種史料館にアーカイブスされ、閲覧が可能になっている。これらのアーカイブスを訪ね調査した佐藤洋一氏は、現在膨大な資料を整理中であるが、その一端を今回発表していただいた。

過去の写真を調べるという時間軸を遡る作業を行いながら、

デジタルアーカイブス、SNS、自動カラー技術といったテクノロジーを援用することで、そのベクトルを未来方向につなげていくというアプローチやそこで見据えるビジョンは示唆的で、EToSの今後を展開を考える上でも大変刺激的な研究会となった。

「シンポジウム:パブリックアートと東京」は、昨年度3月1日に予定していた同シンポジウムであったが、コロナ禍の中延期となった。対面での開催は難しいとの判断で、今年度11月28日(土)の13時~17時でオンライン開催となった。参加者は64人である。

このシンポジウムの趣旨は、東京という都市でのパブリックアートの現状を考えるということにある。戦後の都市計画において、パブリックアートは公共空間をいかに作るかという課題として登場する。そこにはコミュニティのあり方に即して作られるものでもあるが、そこからコミュニティを生み出していく役割も帯びている。基調講演「地域型芸術祭のいま?!~社会のインフラとしてのアート~」を北川フラム氏(アートディレクター、(株)アートフロントギャラリー代表取締役会長、福武財団常任理事)が行い、他3名の講演者が登壇した。高田洋一氏(彫刻家、美術家)「パブリックアートの制作現場から一作



山本真鳥

1981年東京大学大学院社会学研究科(文化人類学専攻)満期退学。日本学術振興会奨励研究員を経て、1984年より法政大学経済学部助教授。1990年より同教授。1978年より2年間合衆国東西センター(ハワイ州)留学。1990年より2年間、カリフォルニア大学バークレー校人類学部客員研究員。2001年より、国立民族学博物館客員教授(2004年度まで)。2011年4月~2012年2月ハワイ大学マノア校人類学部客員研究員、東西センター客員研究員。

品との新しい出会い方」、藤井匡氏（東京造形大学准教授）「パブリックアートのつくる公共性」、荒川裕子氏（法政大学キャリアデザイン学部教授）「パブリックアートの受容のありかたをめぐる」である。司会は山本真鳥（プロジェクトリーダー）が行った。その後、岡村民夫（法政大学国際文化学部教授）、岩佐明彦（法政大学デザイン工学部教授）（両名ともプロジェクト構成員）、岩井桃子氏（キュレーター）がコメントを行った。

北川フラム氏の講演：ファーレ立川は、多様な価値観の表現としてアートをここに設置するというのが主目的であったが、街歩きとしての楽しさが味わえるような企画も要素のひとつである。ここにファーレを守るファーレ倶楽部という市民の会ができて、清掃をしてくれるし、毎年のように様々なイベントも行うし、また学校も教育現場としてファーレを取り込むし、ということでファーレがコミュニティを形成する一助となり、かつコミュニティに守られる存在となった。後半は、均質空間となってしまった都市でのパブリックアートの限界を感じた氏がなぜ地方の芸術祭を主たる活動の場としていったかということが語られた。そこには日常的な自然を大切に、濃密な空間（コミュニティの記憶）を語ろうという努力がある。パブリック

アートはコミュニティの中から生まれる。そしてさらにアートがコミュニケーションを生み、人々をつなげていく力をもつのではなかろうか。

その他の講演者からもパブリックアートがつなげる人と人との輪についての報告があった。後半のシンポジウムではパネリストからのコメントが入り、活発な討論が行われた。この講演シンポジウムは年度内に報告書を出版する予定である。

さらに1月23日（土）14:00～15:30に東京都現代美術館の学芸員丹羽晴美氏を迎えて「東京写真の新たな可能性」という研究会を開催する予定である。

4

Project 4

都市東京の近未来

コモンズを再生する東京（商店街を抱き込む生活圏）

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー 北山 恒

2020年度の「都市東京の近未来」では、近未来の東京をプレゼンテーションする方法としてパタンランゲージの原型のようなクリストファー・アレグザンダーの『人間都市 (a human city)』(1970)を再読し、2020年の東京における近未来のパタンランゲージを作成しようと考えた。

産業革命以降の19世紀、西ヨーロッパに起きた都市化の時代、農村集落から都市へ人の移動が行われた。それは、地縁社会に生きた人が見知らぬ人の集まりである都市空間に移り住み都市労働者となるもので、地縁的共同体を支えるコモンズという場から、個人の利益活動が自由に行えるマーケットの空間に移行することであった。そこでは産業社会が効率よく作動するようにデザインされた都市空間に收容されることによって、人々は産業社会が要求する日常に教化されたと考えられる。このアーバニズムと呼ばれる現象は、個人が集落というコモンズから都市へ生活空間を移動することで経験するものである。

2020年は世界的な感染症コロナによって日常生活は大きく変容した。「新しい生活様式」が提唱されたが、それは毎日オフィスに通勤する往復運動ではなく、テレワークが当たり前となる社会が想定されている。通勤をしない日常生活、そ

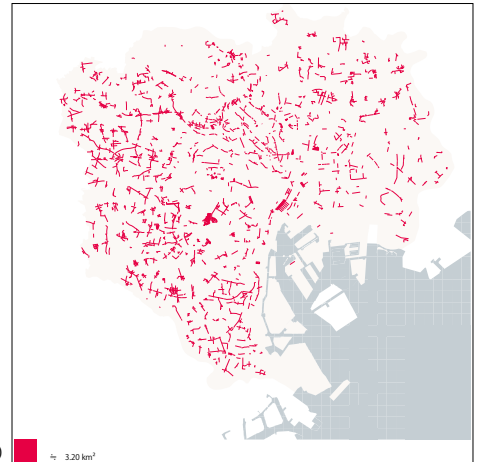
こでは近隣という地域社会が再び重要な意味を持つてくる。日中も生活者がいる生活圏が都市内に登場するのだが、それは個人が都市のマーケット空間から集落のようなコモンス的生活空間に移動することで生まれるのだ。人々はオフィスビルという労働の收容所に拘束されない働き方を知り、そして、経営者も高い賃料を払ってオフィスを構えない選択肢があることが理解された。H.アーレントが指摘する、「働く」ことが「労役 (labour)」ではなく「仕事 (work)」であるという、働くことが個人の意思に委ねられるとき、生産性をもとめる「現代都市」とは異なる、個人の幸福のためにある都市という「もうひとつの都市」像に向けた変化が始まると考えている。近代社会が排除してきたコモンズ (共有地) を再生する契機は、新しい日常生活を支える生活圏をつくることである。

「都市東京の近未来」では、都市内の「紐状の都市エレメント」がつくる生活圏に注目してきた。江戸から続く都市圏では、起伏の多い江戸の町が地形に対応してつくられているので、尾根道や谷道という古道、中小河川とその暗渠、崖線、そして寺社や武家屋敷の敷地境界が地形と関連していたためその境界線が「紐状の都市エレメント」として読み取れる。また寺社地も地形と関係しその参道が商店街になっている場



北山 恒

1950年生まれ。建築家、専門は都市理論。横浜国立大学大学院修了。代表作「洗足の連結住棟」「祐天寺の連結住棟」で日本建築学会賞、作品選奨受賞など。著書に『都市のエージェントはだれなのか』TOTO出版(2015)、『モダニズム臨界』NTT出版(2017)、共著に『TOKYO METABOLIZING』TOTO出版(2010)などがある。



紐マップ(東京の都市に分布する商店街)

合もある。このような「紐状の都市エレメント」は建物が建て替わっていて江戸から続く数百年の時間継続して存在しており、人々の記憶の中でコミュニティコア(生活圏)として認識される。東京の23区には1,771の商店街があるが、その多くはそのような「紐状の都市エレメント」である。この商店街を抱き込む生活圏を想定し、そのなかに都市におけるcommons再生の可能性を調べている。23区内の商店街の総延長は約640kmあって、商店街の道路を廃道にして歩行者モールとすれば約3,2km²の歩行者空間が生まれる。これは皇居の面積の1,5倍の広さである。さらに、商店街は東京の都市内にかなり均等に分布している(紐マップ)のであるが、それは、商店街が日常の買い回りなので商店街を中心とする生活圏が存在していることを示している。商店街の商圏を500mとすると東京23区の全域をほぼカバーする。なので、東京に住む人は誰もいずれかの商店街に帰属しているという感覚を持っているのではないかと思う。商店街に共有の居場所であると感じられる空間が用意され、たとえば顔見知りの店主をハブに人々が交歓できる場が生まれれば、そこにcommons再生する可能性がある。

提案する商店街のパターンランゲージは以下の記述を記号化

するものである。歩行者モールとした両側町で、店前空間には商品がはみ出ることが許され、道には一坪ショップのワゴンやテーブル・イスが置かれ、近くの食堂の天蓋付きのダイニングスペースとなる。空き店舗は「町の道具箱」となり、テンポラリーなイベントスペース、共同キッチンや子ども食堂、障害者施設や高齢者のための公共サービス施設が設けられる。各店舗に本棚を設け、そこに店舗に関係する本が置いてあるようなリトルライブラリーのネットワークもできる。商店の2階にある空き室には学生が勉強するためのラーニングcommonsのラウンジのようなスペースや、もちろんコミュニティオフィスとしてのコワーキングスペースが設けられる。さらに、廃道する道はアスファルトを剥いて大きな樹木を植えてはどうだろう。このように商店街を再編すれば近隣に包容力のある空間を提供することができる。かつてW.ベンヤミンがパッサージュ(パリのガラス屋根付き商店街)を「ユートピア共同体の推進力である」としたように、商店街は東京という都市においてcommons再生の推進力となるかもしれない。

2021年3月13日に「commonsを再生する東京」というタイトルでシンポジウムを予定している。

5

Project 5

江戸東京アトラス

名所の変遷から江戸東京の基層を探る

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー 福井恒明

江戸東京アトラスプロジェクトは2020年度より「江戸東京のユニークさ」プロジェクトから独立して単独のプロジェクトとなった。近年利便性が向上したGIS(地理空間情報システム)を利用してEToSの成果を発信する試みとして、学部生・大学院生の協力を得ながら文理協働で活動を行っている。分野横断的なメンバーで構成されたEToSならびに総合大学としての本学の強みを活かし、人文地理学・都市史学・景観工学などの多角的な視野をもって成果を得ようとするプロジェクトである。

アトラスとは、地域に関するさまざまな情報を地図上に表現することによって、地域の本質を追究する手段であり、地域理解の方法そのものである。「今の東京のユニークさの源泉となっているこの都市／地域の基層に光を当て、その構造を明らかにする」「世界のなかでも独特の性格をもつ巨大都市東京の成り立ちを多角的な視点から解明する」(いずれも陣内秀信・初代センター長)というEToSのミッションに対して、アトラスは時空間をビジュアルに表現することを通じて貢献しようとするものである。

アトラスを実現するためのGIS関連技術の進歩と普及は目覚ましいことから、これらは既存のシステムを用いることとし、

江戸東京アトラスプロジェクトとしては、江戸東京の基層構造を明らかにする研究とその成果の地図表現検討の作業を行っている。具体的には「名所の変遷から江戸東京の基層を探る」とのテーマを選定した。名所案内の内容や挿し絵、浮世絵を丁寧に読み解き、江戸東京を構成する要素や領域がどのようなもので、時代によってどのように変遷してきたのか分析し、地図表現することに取り組んでいる。

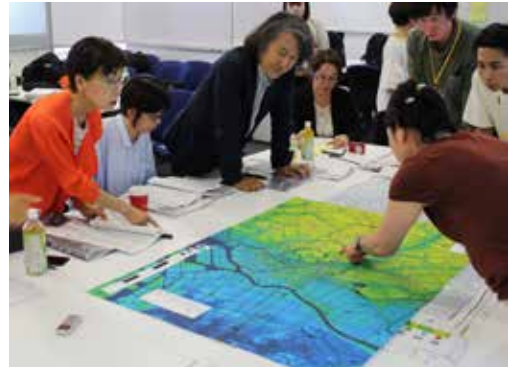
2020年度は『名所江戸百景』の視対象分析にもとづく江戸の周縁領域考察、『新撰東京名所図会』に掲載された名所の種類や分布、表現方法に着目して明治期の人々の持つ東京名所のイメージ検証に取り組んだ。しかしながら今般の新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、対面で資料を参照しながら行う分析作業の実施が大きく制約された。当初5月に予定していた研究ワークショップは延期し、11月にコアメンバーの対面会議にリモート中継を併用して実施した。また、2021年2月末にはEToS全体から分野横断的な参画を得て、2回目のリモート研究ワークショップを開催した。

『名所江戸百景』の視対象分析については、江戸の周縁部を描いた23点に着目し、既往研究や他の名所案内本、数値地図の3次元表現などを用いて詳細な分析を行い、視対象



福井恒明

1970年東京都生まれ。東京大学工学部土木工学科卒、同大学院修士課程修了。清水建設、東京大学、国土交通省国土技術政策総合研究所などを経て2012年法政大学准教授。2013年より同教授。専門は景観工学。編著書に『景観用語事典』『コンパクト建築設計資料集[都市再生]』『水都学V』など。千代田区などの景観行政、葛飾柴又・四万十・佐渡の文化的景観に関わる。



や対象領域を特定してGIS上に表現した。建築物や特徴的な要素に着目している既往研究に対して農地・広野・山林などの背景的な領域に着目し、それらの範囲を地図上に示す試みを行った。その結果、場所により5kmから15km程度の視程で郊外領域がとらえられていたことを指摘した。これまで江戸の領域については、朱引や墨引、あるいは江戸五里四方・十里四方といった概念で周縁部が語られてきたのに対し、名所江戸百景の眺めの描写を通じて武家地・町人地・寺社地だけでなく江戸が周辺農村へと広がる状況に注目し、作者の歌川広重のみならず、江戸の人々が持っていたであろう江戸の領域認識を解明し、表現する作業を行っている。

『新撰東京名所図会』の名所分析についてはまず都心の麹町区・四谷区・牛込区を対象とした作業を行った。その結果、欧米化・近代化の進む首都東京のなかに過去の江戸を重ね合わせることで、近代東京の名所風景が形成されていたととらえることができた。これをもとに分析対象範囲を15区に拡大した。また、挿絵の表現手法や構図についての分析にも着手し、離れたところから眺める風景から、その場に行き行って見る具体的なものへと変化してきたことを指摘した。さらに江戸

東京研究を相対化する視点から、京都の名所図会をとりあげてその分布や表現について検証した。

全体として、①江戸から明治に時代が変わり、江戸の名所と東京の名所の内容と分布がどのように変化してきたのか、それらはどのような関係性を持っているのか、②図会等に掲載された絵や写真の表現をもとに名所のイメージとその社会的意義がどのように変化したのか、が論点になっており、これらについて今後議論を進め、その成果をアトラスとしてビジュアルに表現する検討を行っていく。

研究会

「東京の京友禅」

開催日：2020年1月25日

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス

伝統ある京友禅であるが、それが大正・昭和初期の産業革命の影響下で、どのようなファッションを作り上げていったかがテーマである。発表者は、東京女子美術大学で染織を学び、テキスタイル・デザイナーとして働き、その後商品の企画、海外留学、営業として海外から商品調達の仕事をし、現在は大学で教鞭をとりつつ、研究活動を行い、日本のテキスタイルの海外普及にも関わっている。

手描き友禅は、17世紀に宮崎友禅斎が考案した。その前には絞り染め、型染めなどしかなく、フリーハンドで柄を染めるということはなかった。友禅染より前に刷り染めという技法があったが、刷り染めや刷友禅と呼ばれるようになった。

日本の産業革命後に写し友禅（型友禅）という技法ができ、その後シルクスクリーンや機械捺染も輸入されて、それらも友禅とされた。最近ではインクジェットプリンタで染めた友禅もある。素材はいろいろだが、木綿に染めたのだけは友禅と呼ばれない。在来の技術があったので、海外の染料を輸入するだけで、いろいろなことが出来るようになった。

一方開国後、モスリンの輸入が始まる。ウールのモスリンは発色がよかった。木綿に比べて暖かく、軽く、またしわになりにくく、安いために、長襦袢として普及し、外出着にも用いられ、大正の初めには国産ができるようになった。関東大震災後、絹の銘仙が流行することになった。銘仙は質の落ちる絹を用いて、無地や縞柄、緋などとなり、関東を中心に26年間で2億反生産された。上流階級では普段着に、下々では晴れ着となった。

さて友禅は、長い間高級品として、人々は晴れ着に用いてきた。普及版の新しい技術を用いた比較的安価なものが出回る一方で、手描きの高級品も作られていた。昭和7年～10年くらいで、銘仙は7円前後、モスリンは4円前後。友禅は、羽織が40円台、下の着物が30円台。仕立代も友禅はそれなりに張る。現在の日本橋あたりでは、大正となる頃、大店の呉服店がデパートになった。関東大震災後、技術の向上が安価な生地を生んだ。百貨店では陳列販売、定価販売が始まり、女性たちが自由に見て回れるようになる。大震災後には百貨店が中流の商品も扱う。しかし流行の発信地となるために、

発表者：岡本慶子（法政大学経営学部教授）

コメンテーター：榎一江（法政大学大原社会問題研究所教授）

デパートは問屋と組んで、高級品の開発を行った。力のある問屋と一緒に、〇〇会といったものを作って、商品開発をして、陳列、図録の制作、江戸時代の衣装や古代裂などの収集も行う。その一方でもう少し安価なものも売った。京都の呉服問屋も、職人や関連の工房などと共に商品開発や展示会を行った。ため息をつくような名品が当時のカタログに掲載されている。今はどこにあるのか分からないが、コレクターが保存してくれていることを望みたい。しかし、昭和15年には高級品の生産を抑制する法律ができる。戦争中には生産は下火となり、残念な結果となる。

友禅とアートということを考えて、友禅は作られたときは商品。着物は古着になったときアートに変化する。維新の頃には、武士の家庭から大量に売りに出て、海外に流れていった。着物が特別なのは、生地が切り刻まれてしまうことがなく、一定の長さで保存されているということである。大正昭和の着物も現在では海外ではアートとして保存されている。商品としての研究も行われるべきであるが、日本人として、着物がどのように作られたかを海外の人にも説明できるようにしたいと考えている。

コメンテーターは、この分野の経済学的研究は製糸業・紡績業・織物業というふうに分断されて研究がなされているが、このようにそれを横断する研究は新しい視点を生む可能性ももっていて、大変興味深いと語った。生産過程の研究が経済史でも従来型であるが、最近は消費について考える方法が目新しい視点とされるようになってきている。ファッション、消費といったところからの視点は今後ますます重要になっていくだろうと述べた。

（山本真鳥）



岡本慶子氏による発表

シンポジウム

「気候変動と雨水利用～雨水の基準と制度を考える日独シンポジウム」

開催日：2020年2月19日

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス スカイホール

2020年2月19日（水）、「気候変動と雨水活用シンポジウム&セミナー」が法政大学市ヶ谷校舎ボアソナードタワー26階スカイホールにて開催されました。主催は、法政大学エコ地域デザイン研究センター、共催として日本建築学会あまみず普及小委員会、公益社団法人雨水貯留浸透技術協会、特定非営利活動法人雨水まちづくりサポートの3者が加わりました。他に、国土交通省、公益社団法人空気調和・衛生工学会、公益社団法人日本下水道協会、東京都、横浜市、京都市、世田谷区、武蔵野市、公益財団法人日独協会から後援を頂きました。

「雨水の利用の推進に関する法律」が2014年に施行されて5年が経ちましたが、気候変動に関わる災害はその後も激しさを増し、雨水への対策は喫緊の課題となっています。洪水対策等の雨水管理は河川・下水関係の基準や制度が整備されていますが、平水時の流域対策については、必要性は認識されているものの対策が進んでいません。その理由の一つに雨水活用に関わる基準づくりや制度整備の立ち遅れがあると考えられます。そこで、雨水への取り組みが進んでいるドイツの先例に学びつつ、雨水に関する基準や制度について議論を交わしました。参加者は118名で、国内外各地の事例報告をもとに、熱のこもった議論が展開されました。

シンポジウムの成果として、雨水基準制度研究会を立ち上げ、引き続き課題に取り組んで行くことになりました。

(神谷博)



シンポジウムの様子

研究会

「考古民族国際研究センター「Edo Castle Mission」との研究会」

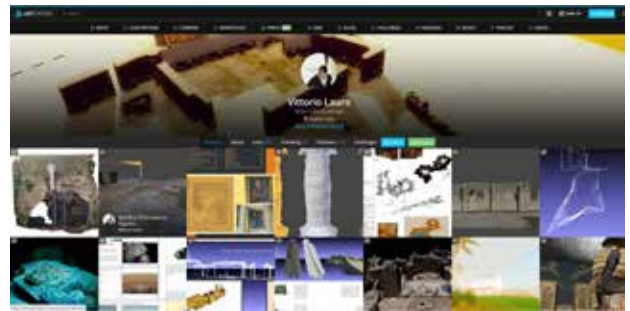
開催日：2020年2月26日

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 S404

江戸東京研究センターEToSでは2020年度の目標に国際的な情報の発信と交流の促進を掲げている。1月イタリアで開催した「ヴェネツィア国際シンポジウム」に続いて、2月にはイタリアから考古学の専門家が2名訪れ、江戸城の復元に関するワークショップを開催した。

イタリアを拠点とする考古民族国際研究センターThe International Research Institute for Archaeology and Ethnologyでは、これまでにイタリアのシチリアやサルデーニャ、また日本の岡山県や滋賀県、長崎県において復元に関するプロジェクトを実施していて、今後の展開として江戸城の復元CG作成に関するワークショップを行った。最初に、代表のDaniele Petrella氏から趣旨が説明され、続いて副代表のVittorio Lauro氏により過去の復元CG例が示された。その作品の完成度はきわめて高く、江戸城で実施する場合の方法や問題点が話し合われた。その結果、今後、共同研究することで双方が同意し、4月に共同研究に関する協定書を締結した。しかしながら、研究費の獲得、行政との連携などが当初から大きな課題となっていたが、それ以上に現地調査が主な活動の一つとなっていたため、コロナの影響で現在は計画が延期になっている。近い将来、江戸城の復元CGを共同で作成することが強く求められている。

(高村雅彦)



上：研究会の様子

下：考古民族国際研究センターのホームページ画面

シンポジウム

「2019年度江戸東京研究センター年度末報告会」

開催日：2020年2月29日

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 市ヶ谷田町校舎マルチメディアホール

2020年2月29日、江戸東京研究センター年度末報告会（シンポジウム）が開催された。今後全体で取り組むべき研究テーマ、HOSEIミュージアムの公開コンテンツ、これからの組織運営のあり方を共通の問題意識とし、全体での意見交換がなされた。

高村雅彦教授（水都・基層構造プロジェクトリーダー兼2020年度江戸東京研究センター長）からは、出版物、報告書、シンポジウムなどはかなり行ってきたが、これからは研究面での体力をつける時期であるとの認識が示された。また、国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターによる融合的なテーマを「新・江戸東京研究」として打ち出すことの必要性や、当面の目標を2021年としながらも、さらに4～5年先を見据えて研究をすすめるべきとの考えも明らかにされた。

北山恒教授（都市東京の近未来プロジェクトリーダー）は、文明的転換点である現代において、江戸の都市構造が残っている東京が世界的に見て独自性を有している点を指摘した。さらに、コミュニティと空間概念の問題等について、プロジェクトの研究活動をふまえて具体的に報告しつつ、都市研究の拠点としての法政大学江戸東京研究センターの可能性が語られた。

小林ふみ子教授は、次年度から「江戸東京の「ユニークさ」」のプロジェクトリーダーに就任する立場から、プロジェクトを新しい方向ですすめるための新たな研究テーマや可能性のある素材の提案を行った。例えば、地図や名所絵、絵はがきを資料として積極的に活用すること、地名の重要性、江戸東京における地震・火事・疫病などの「危機とどう向き合ってきたのか」、変化する時点に着目した研究等。

今年度から「テクノロジーとアート」のプロジェクトリーダーに就任した山本真鳥教授は、四つのプロジェクトの方向性をまとめていくうえでの課題を指摘した。どこまで研究対象を広げるべきか、社会科学系の知見が入っていない現状をどうするかという問題が指摘された。そのうえで、近未来東京から出されたキーワードである「コミュニティ」には親和性があるとの話が出された。

陣内秀信研究員からは、方向性・戦略が重要であり、江戸東京の図会の蓄積はヨーロッパ都市にはない特徴であり、その

意味の解釈が必要であることが指摘された。また、日本の都市には過去の経験を残す方法として、口承文学、地名、地図などがあること、地図研究においては、客観的な都市の変化を追うだけにとどまらない研究が望ましいとの発言があった。また、変化が著しい江戸東京において変わらないもの（地形、お祭りなど）と変わり方の双方に目を配るべきとの提言がなされた。

横山泰子江戸東京研究センター長は、全体の事業報告を行った後、限られたスタッフで、ブランディング事業としてかなりの仕事ができたという実感を語った。その一方で、社会に対するサービスに労力を使った観もあり、次年度以降、研究員のエネルギーを極力学術的な方面で使ってほしいこと、研究成果を出すために各研究プロジェクトをどうすべきかを考えるべきと発言した。コロナ禍の中、大人数での議論自体が難しかったものの、田中総長も同席しての意見交換がなされたことは次年度以降の研究計画を立てるうえで大変有意義であった。

田中優子法政大学総長からは、江戸東京研究センターの調査研究活動の一環として、東京都に対し、政策提言を行ったことが報告された（2019年9月17日に小池百合子都知事に多摩川から外濠に水を引き込むことを含む提言を東京理科大学、中央大学との連名で提言し、2019年12月に東京都が発表した「未来の東京戦略ビジョン20」の中に外濠の水質浄化が明記された）。また、今後予定されている明治大学、関西大学との連携シンポジウムのテーマは「都市と大学」となり、江戸から東京、浪速から大阪への変化と大学の位置付けを考察するとの発言があった。江戸東京研究センターの活動が確実に成果を上げつつあり、今後も期待される旨が述べられた。
(横山泰子)



研究会

「佐原アカデミアとの研究交流会議」

開催日:2020年3月1日

場所:千葉県香取市佐原

千葉県香取市佐原において2020年3月1日(日)に開催が予定されていた「佐原『江戸優り』フォーラム」は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から当日の開催が中止され延期(時期未定)となりましたが、今回のフォーラムの主催団体の一つであるNPO法人佐原アカデミアの招きにより、エコ地域デザイン研究センターと江戸東京研究センターの研究員が佐原を訪問し、現地視察と今後の研究協力についての打ち合わせを行いました。水郷佐原山車会館、伊能忠敬記念館をはじめ、伝統的建造物が並ぶ佐原の町並みを見学した後、佐原町並み交流館の会議室において会議が開かれました。視察で感じられた佐原の町や住民自治の特徴などを確認するとともに、今回のフォーラムで予定されていた講演内容が共有され、佐原の都市研究において対象とすべき学域、時代、地域、史資料の範囲などが検討されました。今後、佐原の都市研究の成果を視覚的な資料としてまとめることなどを構想しながら、エコ地域デザイン研究センターと江戸東京研究センターが佐原アカデミアと協力していくことが合意されました。(事務局)



上: 研究交流会議

下: 佐原の町並み

国際シンポジウム

「都市・自然・人間」

開催日:2020年10月17日

場所:オンライン開催

江戸東京研究センター(EToS)では2020年度の目標に国際的な情報の発信と交流の促進を掲げている。それゆえに、2020年1月イタリアで開催した「ヴェネツィア国際シンポジウム」に続いて、この10月の国際シンポジウムはもっとも力を入れたイベントの一つとなった。第3回東アジア都市史学会国際学術大会との共催により実現したもので、EToSが担当となり日中韓の研究者が一堂に会して活発な議論を展開させた。当初は6月に法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて対面で開催する予定だったが、コロナの影響を受けたために時期を遅らせてZoomによるオンラインでの開催となった。これにより、渡航や宿泊などの手間がなくなり、時差も1時間しかなく、加えて同時通訳のシステムを最大限に活用することで、むしろ気軽に自由な雰囲気の中でシンポジウムは行われた。

複数回にわたる準備会議を経て、テーマは「都市・自然・人間」とすることが決定する。都市と自然のさまざまな関係の上に形作られる人間の営みは、空間や社会の歴史的な観点から見たときに大きな特質となって現れると仮定し、その比較研究を試みたのである。こうして、日中韓のなかでの違いを相互に確認しつつ、一方でヨーロッパとは異なるアジアに特徴的で共通する概念を抽出しようとしたものであった。全体司会は高村雅彦が務め、EToSからの発表者は文系の国際日本学研究所と理系のエコ地域デザイン研究センターが一緒になって設立された当センターの強みを生かして、根崎光男と陣内秀信が担った。江戸東京を対象に、一人は文献史から江戸の特性を導き出し、もう一人は空間的観点からその魅力を描き出したのである。

シンポジウムは上海社会科学院の熊月之による開会のあいさつで幕を開けた。続いて、中国から熊月之「コロナウイルス肺炎の防疫から見た上海のガバナンス能力」、郭長剛(上海社会科学院歴史研究所)「現代中国都市化に関する回想と考察」の報告があり、両者とも現代の中国らしく都市化の問題に焦点を当てた。次に、韓国から朴珍彬(慶熙大学)「美しい都市と田園都市の間:ウォルター・バーリー・グリフィンのキャンベラ都市計画」、禹東善(韓国藝術総合学校)

「高宗時代のハンソン戸籍から見たソウルの空間と社会」の発表があった。とくに、禹は精緻な分析によって近代化以前のソウルにおける都市空間と人々の営みの関係を詳細に説明した。最後にEToSから根崎光男「徳川将軍の鷹狩りと鷹場」、陣内秀信「水都東京—〈水〉から読みとく都市・自然・人間の結びつき」の報告があった。根崎は鷹狩りという世界にも共通する文化にあって、江戸の特質を社会的な場所論として明らかにし、また陣内はこれまでの水都研究の視点を総論的に開示した。その後、各登壇者の中で討論を行った後、最後に元東京大学教授で、現在は青山学院大学に所属する伊藤毅からの確かなコメントをもらい、閉会のあいさつもいただいて幕を閉じた。全体を通してとても内容の濃いシンポジウムであった。

時間だけでなく、システム的な問題から討論の時間が少なかったのは悔やまれるが、国と国の間の距離を超えて、同じ時間に言語の異なる研究者が一堂に会し、一つのテーマをみんなで議論した経験は、参加者全員にとって今後おおいに役に立つことだろう。

(高村雅彦)

The 3rd International Conference of the East-Asian Society for Urban History
17 October 2020
Participation fee: Free ZOOM meeting

CITY

Research presentation (no interpreter)
TIME : 10:00-13:00
※ (JST), UTC +9

Symposium (with interpreter)
「City - Nature - Human being」
Supervision :
Society of Urban and Territorial History
Hosei Univ. Research Center for Edo-Tokyo Studies

TIME : 14:00-18:00
※ (JST), UTC +9

NATURE

Symposium 14:00-18:00

- XUDONG Youchi (Shanghai Academy of Social Sciences)
The Urban governance capabilities of Shanghai in the view of its practice of the Anti-Novel coronavirus pneumonia
- GUO Changgang (Shanghai Academy of Social Sciences)
A General Period of Urbanization/Contemporary Cities
- PARK Jinhui (Kyung Hee University)
Sovereign territorial city and a gender city: Water Supply Control in the case of Gyeongju
- WOO Dongwon (Korea National University of Arts)
Seoul's Space and Society Seen Through Hanseong-hui Family Registry during Gwangmu Period
- NESAKI Mizuru (Hosei University)
Structure about Edo and the Edo grounds of General Tokugawa
- JINNAI Hidemichi (Hosei University)
Tokyo as the Water capital — Colonial City - Nature - Human Being understanding from water

HUMAN BEING

EToS
江戸東京研究センター
Edo-Tokyo Studies



オンラインで開催された研究発表

研究成果公開

「中世武蔵国絵図」

公開日：2020年11月11日

2019年度に府中玉川プロジェクトの成果物として、江戸の基層「中世武蔵国絵図」を作成いたしました。2020年度に入り、これをデータから紙ベースにするための作業を行い、2020年7月に印刷、配布を開始いたしました。印刷部数は500部で、コロナウイルス対策からイベント等人の集まる機会が限られたため、事務局の提案でHPから10月9日に呼び掛けて希望者に郵送することになりました。郵送費のこともあり100名限定で募集したところ、翌日までに150名の希望があり、急遽締め切るとともに、郵送部数を150部に増やして対応しました。

内容については、A1判3回折りでA4サイズになる地図で、表面には趣旨や年表、歴史変遷図などを配し、内側絵図面はA1判で武蔵国を中心とした絵図を描きました。地理的範囲としては関八州、歴史の期間としては935年平将門の乱から1495年北条早雲伊豆国制圧までを記しました。絵図のベースは、以前森田喬先生が作成したGISから起こした立体図を用い、周辺を手書きで描き足して下図としました。ここに、地形地質の基礎データを落とし込み、山岳名、河川名、国府、主要な神社、秩父平氏と武蔵七党の中心地、古道としての鎌倉道、などを記入しました。図の周囲には武蔵国や秩父平氏、古刹の由来、地形や水系、街道の解説などを加えました。地図の方位をどう描くかが問題でしたが、西上で東京湾との関係や富士山との関係を際立たせるような位置どりをすることで北武蔵と南武蔵の関係や府中と江戸の関係が見やすくなるようにしました。結果的に江戸湾がデフォルメされて大きくなりましたが、古東京川の持つ意味もより強く浮かぶ上がらせることになりました。細部の書き込みは不十分ですが、関八州の中での武蔵国を新たな視点から眺めることができたかと思えます。

(神谷博)



PDF公開URL (2021年3月現在) :

<https://edotokyo.hosei.ac.jp/news/news/news-20201009172749>

研究会

「米国写真アーカイブスでたどる占領期の東京」

開催日:2020年11月20日

開催方法:オンライン開催

終戦直後の我が国に進駐していた米国進駐軍は、公的(軍関係)にも私的(各個人)にも多くの写真を撮影している。これらの写真は米国に持ち帰られ、公的な撮影資料に関しては公文書館にアーカイブされているが、加えて個人が撮影した写真も遺族や本人の寄贈によって大学図書館や各種史料館にアーカイブされ、閲覧が可能になっている。一方、占領期に日本人が撮影する機会は限られており、現在では散逸したのも多く、残されたものも関係者により私的に保管されておりアクセス出来ない環境下にある。

建築学科出身の佐藤洋一氏は東京の戦後空間に興味を持ったことをきっかけにこの「空白期」に対し、アメリカで公開されている写真をリサーチし、その写真を読み解き、共有(里帰り)させるという取り組みを行っている。研究会では佐藤氏が米国で収集した写真を豊富に用いながらその取組についてご紹介いただいた。

研究のアプローチとしては「撮影された写真(潜在的史料)」の収集であるが、その眼差しは「撮影されたであろう写真(可能的史料)」に向けられている。研究会で異なる人物が同時期に同じ場所を撮影した複数の写真を題材にして、映る人物や撮られた場所から多角的に都市の様態を読み取った例などが示された。撮影された写真には、当時の空間的な情報だけでなく、撮影者の足取り(行為)や眼差し(社会的・個人的)のレイヤーがあり、いかに現在に伝わったかというメディア史的側面も持っている。こうした写真を里帰り(撮られた場所に戻す)ことをきっかけに今とどう繋げていくのかという問題提起がなされ、展覧会、語る場、調査主体、アーカイブスなどの可能性が示された。

ディスカッションでは同じく戦後の写真とその活用を実践する渡邊英徳氏より、AI技術を用いて写真をカラー化する取り組みの中で生まれた当事者との関わりについて紹介され、膨大に死蔵しているストックを調査しフロー化することで現代に生かしていく可能性などが紹介された。過去の写真を調べるといった時間軸を遡る作業を行いながら、デジタルアーカイブス、SNS、自動カラー技術といったテクノロジーを援用することで、そのベクトルを未来方向につなげていくというアプローチやそこで見据えるビジョンは示唆的で、EToSの今後の展開を考える上でも大変刺激的な研究会となった。(岩佐明彦)

江戸東京研究センター「テクノロジーとアート」プロジェクトチーム研究会 米国写真アーカイブスでたどる 占領期の東京



写真上: 銀座地区を撮影した米軍関係者の写真。左: 第二次世界大戦後、戦後混乱期を知る貴重な記録となっている。右: 米国公文書館所蔵(1945年9月21日)米陸軍通信隊撮影。写真下: 全米Eastman Kodak Exhibition Tourney Photo Collectionより。所蔵: ユタ大学リオン図書館所蔵

占領期に進駐した米軍関係者はプライベートも多くの写真を撮影しています。これらにはカラー写真も含まれ、戦後混乱期を知る貴重な記録となっています。遺族によって寄付され米国の図書館にアーカイブされているこれらの写真の収集と分析を続ける佐藤洋一先生(早稲田大学教授)をお招きし、アーカイブに残された写真を読み解き、地域に還元する取り組みについてご紹介いただきます。

【発表者】佐藤 洋一氏
(早稲田大学社会科学総合学術院 教授)

【モデレーター】渡邊 英徳氏
(東京大学大学院情報学環 教授)

2020年11月20日(金)
18時~19時30分

オンラインにて開催
(オンライン会議システムZoomを使用します)

参加無料
事前申込が必要です



事前申込はこちら
<https://forms.gle/8xTpiqAm1MHK1gEN9>



EToS

江戸東京研究センター
Edo-Tokyo Studies

法政大学
Hosei University

お問い合わせ | 法政大学江戸東京研究センター
102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1
Email: edotokyo-jmu@mi.hosei.ac.jp

研究会

「東京の新名所「史蹟と銭湯」

開催日：2020年10月24日

場所：オンライン開催

昨年度末に開催予定だった「江戸東京のユニークさ」研究プロジェクトの研究会を、約半年遅れで開催することができました。当日の参加者は、71名でした。

今回はこれまで積み重ねてきた江戸東京の名所に関する研究会の節目として、「新名所」というテーマを設定しています。斎藤智志氏（日本近現代史）による発表「近代東京における史蹟保存事業とその周辺」では、近代東京における史蹟保存事業の経緯が明らかにされました。東京の史蹟保存事業は1900年前後に始まり、国レベルの保存事業と並行して行われたものでしたが、1919年に制定された「史蹟名勝天然記念物保存法」のもと、調査・保存がすすめられながらも、関東大震災と復興事業、都市開発にともなう史蹟破壊の危機にもしばしば直面しました。近代以降に整備された史蹟は、近世の「名所」と重なる部分はありつつも、異なった価値認識のもとに成立していました。史蹟の物質的要素に学術的・文化的価値が見出されたことで、古墳・貝塚が史蹟として加えられ、建造物に江戸の特色が見出されるようになりました。また、多数の墓・旧宅・学塾・事件跡などが指定・仮指定・標識されたものの、風教に資するか否かで序列も生じました。また、モノのない史蹟や伝説地は保存法の対象とはなりえず、該当する場所に標識をつけ、記録するという形がとられました。幕末・明治期以降の史蹟がナショナリズムの観点から重視されました。以上、東京の史蹟保存事業の特徴として、墓の多さ、モノのない史蹟への「標識」などの扱い方、幕末・明治期史蹟の多さは東京の特徴である可能性が指摘されました。東京の史蹟保存事業には東京市公園行政の関与、江戸回顧志向、掃苔文化との関連も重要な論点です。斎藤氏の発表に対し、人文地理学の米家志乃布氏が、東京の史蹟地図を示し、名所の分布と同様に史蹟の分布に空間的な偏りがみられることを指摘し、この空間分布は当時の人々の価値認識の結果であるとコメントしました。

栗生はるか氏による発表「ご近所のぜいたく空間「銭湯」現状と可能性」では、江戸から継承され近代に発展した東京の銭湯が、近年消失の危機にあるという現状をふまえ、豊富な事例をもとに、消えゆく銭湯をどのように保存、維持していくかという極めて現代的な問題が投げかけられました。栗生氏（建築 都市研究）は「文京建築会ユース」として、文京

区の魅力の掘り起こし・共有・継承に関する実践的な活動を行った経験から、特に銭湯を「多世代共生」「地域の生態系」の核として評価しています。戦後の全盛期（昭和40年頃）東京で2600軒以上あった銭湯は現在では500軒と激減し、現在も経営維持のために様々な試みがなされているものの廃業に追い込まれる銭湯も多いことが述べられました。具体的な銭湯の保存活動を通じ、まちの文化資源である銭湯の価値（地域の防災拠点、コミュニティの場等）が十分に認識されることの必要性や、観光客をひきつける新しい名所としての可能性が示されました。そのうえで、人々の日常生活に密着していた銭湯が「非日常的なぜいたく空間」として位置づけられることで新名所となり得ること、生活者と地域外の人をともに惹きつけるバランス感覚が必要であることが述べられました。岡村民夫氏（文学・表象文化論）からは、銭湯にとって温泉の情報発信が参考になるだろうというコメントや、夏目漱石による日本近代温泉文学・銭湯文学の発祥地として文京区を位置づけるなど、物語を活用して銭湯の文化的価値をアピールしてはどうかというコメントがなされました。東京は極めて変貌が著しい都市であり、歴史ある名所が保存される一方、時代に即した新名所も作られています。過去の名所のあり方に学び、新たな名所の創出方法にまで話が広がり有意義な議論をかわすことができました。（横山泰子）



東京の新名所「史蹟と銭湯」

江戸東京研究センター「江戸東京のユニークさ」プロジェクトチーム研究会



近現代の東京には、伝統的な名所に加え、新しい名所が次々と誕生して人々をひきつけてきました。歴史上重要とされる「史蹟」と、庶民生活の憩いの場「銭湯」は、ともに近現代の東京名所を考ふるうえで重要です。近代東京の「史蹟」はどのような社会背景のもとに誕生され、継承されたのでしょうか。また、東京の現状に即してあった「銭湯」は、現代人の非日常的な贅沢空間として名所を獲得するのでしょうか。江戸東京研究センターの若手研究員の発表をもとに、近現代の東京の新たな名所形成の動きについて考えます。

14:00～ 「近代東京における史蹟保存事業とその周辺」
斎藤智志（秋山庄太郎写真美術館主任学芸員）
15:10～ 「ご近所のぜいたく空間「銭湯」—現状と可能性—」
栗生はるか（法政大学江戸東京研究センター客員研究員）
コメンテーター 米家志乃布（法政大学文学部教授）
岡村民夫（法政大学国際文化学部教授）

2020年10月24日（土）
14時～16時30分
オンラインにて開催
参加無料・事前申込が必要です
事前申込はこちら
<https://forms.gle/yT8QCh8tVat1W18>

ETOS 江戸東京研究センター
E-mail: edotokyo@pu.tsinghua.edu.cn

特別講義

「神谷博 法政大学退任記念特別講義」

開催日：2020年11月11日

場所：千代田区立日比谷図書文化館

日比谷コンベンションホール(大ホール)および中継

2020年11月11日(水)、「サバイバルエコロジー」と題して、神谷博法政大学退任記念「環境生態学」特別講義を行いました。当初、3月8日に法政大学市谷町校舎で開催予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で延期となっていました。半年ほど先にはできるかと思っていましたが、大学施設が使えない状況が続き、リモート講義を準備していました。しかし、少人数でも会場で実施してほしいとの声もあり、リモートと併用で開催することにいたしました。

会場は千代田区立日比谷図書文化館の大ホールとし、207名定員のところ、参加定員を50名にして開催いたしました。会場側でも対策が施されていて、何とか無事終えることができました。内容は3月企画に比べコンパクトにして、大学での講義を主としてお話ししました。初めのご挨拶と紹介は、陣内秀信特任教授にお願いし、講義終了後には日本大学特任教授の糸長浩司氏をゲストに迎え、コメントをいただき、陣内先生を交えて3人で意見交換をいたしました。

ゲスト対談のテーマは「人新世を見据えて」としました。人のサバイバルを生態学の視点から見てお話した内容を踏まえて、近未来に人はどう生きるか、語り合いました。難しいテーマですが、陣内先生のテリトリー論と糸長先生のバイオリージョン論が重なり、将来の展望を垣間見ることができたかと思います。(神谷博)



第11回外濠市民塾

「『外濠BAR』おぼんカウンター作成」

開催日：2020年11月29日

場所：Lowp、外濠近辺

2020年11月29日(日)、第11回外濠市民塾「『外濠BAR』おぼんカウンター作成」を開催しました。第10回外濠市民塾(2019年8月7日)以来、コロナ禍での活動見合わせを挟んで1年3ヶ月ぶりの開催となりました。今回は一般に公開するイベントは見合わせ、感染対策を行った上で学生スタッフ(法政大学・東京理科大学・日本大学・東京都立大学)と、三輪田学園の生徒さんによる内部活動として実施しました(会場:Lowp(ロウプ))。

タイトルにある「おぼんカウンター」とは、外濠公園の柵にもたれながら軽い飲食をするための木製の台のようなもので、使用するときだけ柵にひっかけて使えるようになっています。これらは学生が何度か試作した上で設計を行いました。今回は三輪田学園の生徒さんに「おぼんカウンター」をペイントしてもらい、さらに外濠公園のどこでこれを使うとよいかという場所探索のフィールドワークを実施しました。

福井恒明・法政大学教授による開会挨拶のあと、学生スタッフによる進行説明を行い、3グループにわかれ、事前に学生スタッフが作成した「おぼんカウンター」に思い思いのペイントを施しました。

きれいに塗られたカウンターを持って外濠公園にフィールドワークに向かい、どんな場所でカウンターを使いたいか、その場所からどんな風景が見えるか、などを話し合いました。

会場に戻ってフィールドワークの結果報告を行い、外濠をどのように使いこなしていきたいか、自由な意見交換を行いました。

最後に、吉田珠美・三輪田学園高等学校校長、高道昌志・東京都立大学助教(エコ研客員研究員)、郷田桃代・東京理科大学教授、福井恒明による挨拶で終了しました。(福井恒明)



外濠公園で「おぼんカウンター」を使ってみるフィールドワーク

シンポジウム

「パブリックアートと東京」

開催日:2020年11月28日

開催方法:オンライン開催

北川フラム氏は、パブリックアートのメッカ、ファーレ立川を企画したアートディレクターであり、その後地域型芸術祭「大地の芸術祭」(新潟越後妻有)や「瀬戸内国際芸術祭」などでも総合企画を行っている。以下が基調講演の内容である。

米軍跡地が日本に返還され、パブリックな空間をどうするかという大きな都市計画の試みの中で、立川駅の北側に11棟のインテリジェント・ビルが建設される。そこにイベントを行う場所をどう組み込んでいくかという企画のコンペがあった。そこで提案したパブリックアート群がファーレ立川で、1994年に完成した。多様な価値観としてアートをここに設置するというのが主目的であったが、街歩きとしての楽しさが味わえるような企画を心した。ここにファーレを守るファーレ倶楽部という市民の会ができて、清掃をしてくれるし、毎年のように様々なイベントも行うし、また学校も教育現場としてファーレを取り込むし、ということでファーレがコミュニティを形成する一助となり、かつコミュニティに守られる存在となり、こういうのがパブリックアートの役割であると考えている。

ただし、都市でのパブリックアートというのは、限界があると考えている。それは都市が均質空間になってしまっているからであり、ここではもうパブリックアートを作り出すということがかなり厳しくなっているのではないかと、という思いがある。それで、ここのところは、田舎でのパブリックアート企画に力をいれるようになってきた。都市の均質空間や共通体験のなさに代わって、田舎ではもうちょっと強い時間が流れ、そこにさまざまなコミュニティの物語がある。例えば瀬戸内の大島というところは、ハンセン病の病院と隔離施設があったところで、彼ら自身の体験を伝えるようなアート展示を行っている。そういうものを拾っていくことで、更に地域の壁を越えたコミュニケーションが成立してくるのではないかと。そしてさらにアートがコミュニケーションを生み、人々をつなげていく力をもつのではなかろうか。

例えば、地域的な生活格差があり、その間を大変車線の多い高速道路が走っているというところがミネアポリスにあったが、その間を人が2人やっとすれ違えるような歩道橋を作ることをアーティストが提案した。この場所を通行する人は、対面で来る人を無視できない。声をかけることで、両コミュニティの間に知り合いが増え、コミュニケーションが成立するように

なった。これなどはパブリックアートの傑作ではないだろうか。

また、途上国の開発にもアートを利用しようという動きがある。スリランカの東岸のいくつかの地域コミュニティを巻き込むアートプロジェクトの公募が世界銀行によって進行中である。やはり工場を作り続けるのではなく、第一次産業とか、育児とか健康とかをベースにして開発も考えていこうということではないかと思う。日常的な自然というのを重視するのが氏の立場である。

パブリックアートの作家(美術家、彫刻家)である高田洋一氏の講演は、さまざまな作品を見せていただける楽しい講演であった。高田氏は、竹や和紙を素材として、空気の動きで微妙な動きを見せる動くアートを制作していたが、やがて注文に合わせて80年代の半ば頃から、公共空間にアートを提供することを始めた。工業化社会の専門化、分業化の流れの中で、それらをアートのモノづくりによって横につなぎ、日本の工業技術に、改めて「クラフトマンシップを復権」させるという野心を抱くに至り、パブリックアートの分野へ足を踏み出していった、と語る。建築家とのタイアップが欠かせず、さまざまな建築条件をクリアしつつ、職人、工場、材料メーカー、構造設計者、注文主、建築家、造園家などとのバトルを繰り返しながら完成に辿り着く醍醐味について熱く語る氏の表情は明るく、実際の作業現場のビデオには喜びの笑顔があふれる。作品は日本社会の実力の現れでもあるという。

藤井匡氏は、美術館の学芸員を務めた後、現在美大で彫刻を中心に美術史・美術評論の研究を行っている。過去50年間に公共空間で行われた美術活動を、野外彫刻、パブリックアート、アートプロジェクトという一連の流れとして考えるという立場をとる氏の著作に『公共空間の美術』がある。パブリックアートは主としてバブルの頃に都市の再開発が行われるという流れの中で都市のあちこちに作られていく。一方アートプロジェクトはもっぱら21世紀になった頃から、疲弊する地方の再生というテーマの中で生じているものであるが、そこではコミュニティという意味でのパブリックがもっと強調されるようになっていないだろうか。アートとして、「場所の美術／空間の美術」「やすらぎの美術／にぎわいの美術」といったコンセプトを通じての分析の後に、パブリックアートとは、人々に愛されることが必要であるという結論に辿り着く。

その点で北川氏の考えとも通底するところがあるのではなからうか。八王子では駅周辺のパブリックアートを自発的に清掃する市民集団ができていそうである。

本学キャリアデザイン学部で美術史とアートマネジメントを講じている荒川裕子氏は、パブリックアートを巡る大学生参加の授業の試みについての報告であった。学生アンケートに取り組んだ実例から始めるが、学生にとってパブリックアートとは、彼らにとっての関心と呼んだものである。おおよそ学生の40%は知らないと答える。名前を挙げてもらった中には、アートとしてどうか、というものも多く含まれる。たとえば、新宿のLOVEとか神戸のBE KOBEなど、またパブリックアートブランドとしてよく知られた岡本太郎作太陽の塔といったものが出てくる。彼ら自身の心象風景なのだと思う。またその意義を訊ねると、気軽に無料で楽しむことができるという答が返ってくる。パブリックということに関しては、お上のすることというよりは、公共の役に立つといったことを考えているようだ。ただファール立川のことになるとあまり知らない学生が多く、知るようになると好きになり、もっと他の人に伝える活動をしたということ、若手ミュージシャンにパブリックアートの前で演奏してもらい、ミュージックビデオとしてyoutubeで発信する試みを行った。また立川紹介のガイドマップを作ったりもしている。パブリックアートを刺激としてゼミ活動が広がっていた事例として紹介された。

パネリストからのコメントが入り、活発な討論が行われた。すべて書き出すことはできないが、いくつかかいつまんであげておきたい。岡村氏は、ファール立川と越後妻有の違いについて、妻有の方が、地形をうまく生かすことができているのではないかと、との指摘があった。岩佐氏からは、コロナ後のパブリックアートの可能性について質問が出た。北川氏はこの質問に関してはネガティブであった。というのはコロナ問題の評価はコロナ終息後すぐには出ないから、ということである。また岩井氏は、作家の仕事に大変興味をもち、パブリックアートの制作には多くの人々が関わって、なかなか完成品からは分からない協業努力の側面が大変興味深かったとコメントした。それぞれの講演者の制作現場や研究過程におけるコミュニティとの関わりについての質問が出た。

(山本真鳥)

**シンポジウム
パブリックアートと東京**

都市の公共空間におかれたパブリックアートは、都市文化の中心でもあり、またその背景でもあります。現代都市に欠かせない存在としてのパブリックアートが、東京でいかなる姿を見せ、いかなる存在であるべきかを考えます。新型コロナ後も見据えた議論を展開します。

主催：江戸東京研究センター「サカノシローとアート」プロジェクトチーム
本年3月から開催が延期になっていたシンポジウムをオンラインにて開催します。

◆基調講演
北川裕子「地域創生戦略のいざやー社会のインフラとしてのアート」
[アーティスト、東京大学にキャリアと地域創生委員、公益財団理事長]

◆講演
高田洋一「パブリックアートの制作現場から一作品との新しい出会い」
[彫刻家、美術家]

岩井蓮「パブリックアートのつくる公共性」
[東京造形大学准教授]

荒川裕子「パブリックアートの受容のありかたをめぐって」
[法政大学キャリアデザイン学部教授]

パネリスト：岡村長典(法政大学国際文化学部教授)
岩佐由希(法政大学デザイン工学部教授)
堀井結子(キュレーター)

後 援：高村隆志
(法政大学江戸東京研究センター長・法政大学デザイン工学部教授)

司 会：山本真鳥
(プロジェクトリーダー・法政大学経済学部教授)

2020年11月28日(土)
13時～17時
オンラインにて開催
事前申込が必要ですが
参加無料

事前申込はこちら
<https://forms.gle/KXMDM0rgE99nHqR7>

ETOS 江戸東京研究センター
Edo-Tokyo Studies

法政大学
HOKUSAI UNIVERSITY

法政大学江戸東京研究センター
102-8102 東京都千代田区土町2-1-1
Email: edotokyo@edu.hokusei.ac.jp

シンポジウム

「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」

開催日:2021年2月20日

開催方法:オンライン開催

江戸東京の「ユニークさ」を探るうえで国際的な比較が重要であることは論をまたない。とりわけ、漢字漢文の文明を共有し、文物の交流もさかんであった近隣各国の都と較べることで都市としての特徴がみえてくる。そう考えて企画したのが朝鮮王朝時代の首府漢陽こと今日のソウルとの比較研究である。本企画では学者柳得恭(1749~1807)が著した『京都雑誌』の「風俗」編を元に著された秦京煥『朝鮮の雑誌—18~19世紀ソウル両班の趣向』(素々の本 2018年)に即し、都市空間のなかでの生活文化がかいま見えそうな4章を取りあげ、発表者でもあった金美眞・鄭敬珍両氏の翻訳によって同時代の江戸との比較を試みた。多くの共通点があることは企画段階で予想はしたが、想像以上の共通点と、それゆえに際だつ両国の文化的志向の違いが浮かびあがってきた。

発表の一つめは「演奏と踊り、そして芝居」の章に基づく、土田牧子氏(共立女子大学)の「18世紀の江戸と漢陽における舞台芸能の諸要素」であった。音楽を中心に近世~近代日本の芸能を見てこられた土田氏らしく、原書の記述、さらに朝鮮の文献や絵画において芸能の様態や楽器をていねいに推測し、その分析に基づいて、それらを広く、能狂言や民俗芸能を含む日本の諸芸能と比較し、共通する要素を指摘された。宮廷か民間かという興行の場や背景の違いの大きさがある一方で、朝鮮で発達した獅子舞が、古く日本に伝来し歌舞伎のなかで大きな発展を遂げたことが論じられた。また共通して都市の芸能が地方の芸能と交流しながらそれを吸収していくさまも窺えた。

ディスカッションの山田恭子氏(近畿大学)からは、百済伝来の獅子の展開について、大元の中国も含めた総合的な研究が望まれること、さまざまな楽器や人形劇など諸芸能の詳細についての見解が出された。

二つめの発表は「市場にはあらゆる食べ物と詐欺師、そして語り手」の章による金美眞氏(韓国国立芸術総合学校)の「18-19世紀の漢陽と江戸の市場、その中を覗いてみる」であった。近世日本の記録的な文献(随筆)を研究されている金氏は、いずれの都市でも市場で各地の多彩な産物が売られたさまが文献の記述や詩歌、絵画において描かれたことを多角的に提示された。都市の豊穡と繁華を描いて祝福す

るのは東アジアの都市表象の伝統であるなか、漢陽では店舗に固有名詞が付されないのに対し、江戸では屋号や商標が描きこまれる例が見られるという指摘もあった。一方、漢陽の方には「語り手」(講釈師)とともに客引きや詐欺師の記述もあるが、この点では江戸については今後の課題とされた。[とはいえ、実際江戸の都市風俗の記述にはあまり見られない類の記述か。比較によってそれぞれにおいて、実際にはあっても描かれなかったものも見えてくる。]

ディスカッションの金谷匡高氏(法政大学)からは、このあと近代以降の政策的な背景に由来する農産物をめぐる状況の変化と市場の移転についての紹介、さらに表の大通りと市場の位置関係について、江戸東京では市場が一本裏に展開するのに対して、漢陽では表通りに店舗が並んでいることが興味深いという指摘があった。

三つめの発表は「花を育て、木を植える」の章による、市川寛明氏(江戸東京博物館)の「園芸文化で比較する漢陽と江戸」であった。かつて大規模な「江戸の園芸」展を企画・担当され、また漢陽の文人の生活を紹介する展示にも関わられた経験をふまえ、両都市においてこの時代に文化として庭園造りや花卉園芸が盛んに行われたことが共通し、その商品化や温室栽培の技術の発達が見られることを論じられた。一方で、菊や梅といった中国由来の正統的な文人文化のなかで愛された花に対して、俗化を忌避した朝鮮に対して、日本では接ぎ木や形作りによってそこから大きく逸脱していくという傾向の違いが指摘された。

ディスカッションの横山泰子氏(法政大学)からは李御寧『「縮み」志向の日本人』(1982)をふまえた質問があった。自然に人為的に手を加えて享受する日本文化に対して、韓国や中国では自然のままを愛するという美学の相違があるとすると同書の所論との関わりについての問いで、市川氏からそれに合致する例として日本の庭園における縮景が挙げられた。

四つめは「花見はここで」の章をもとに鄭敬珍氏(檀国大学)が「江戸、漢陽にみる花見と遊山」と題して報告された。漢陽では桃や杏、ツツジ、柳、蓮をはじめとする四季折々の花や樹木が都城の周縁領域で楽しまれ、それらを詩に詠むことがさかんに行われ、桜とともにそれらも含め江戸東京でも、

花見の行為としては同様である。日韓の文人文化比較を専門とする鄭氏は、両国の状況をふまえて、宗教色や政治色の濃淡においては相違が見え、とりわけ自然の側に赴こうとする朝鮮の文化と、自然を日常の側に取りこもうとする日本の文化という対照が見られることを論じられた。

ディスカッションの高村雅彦氏（法政大学）からは、城壁の外側に花の名所が形成された漢陽に対して、江戸では町奉行支配域を示す墨引きと、広義の府内「大江戸」を表す朱引きの間に多くが設けられ、狭義の市中外にあるという共通点を指摘された。さらに北京や蘇州などの中国の例をもふまえ、江戸の場合はそのような地が聖俗の境界域に相当し、花見の場がそこにあるのが一つの特徴で、それぞれに誰がなんのために整備したのかその意図を考えてよいという指摘があった。

最後の総合討論は、依頼していたお二人から、コメントをいただいて時間切れとなった。染谷智幸氏（茨城キリスト教大学）からは、まず、横山氏のコメントや鄭氏の発表を受けて、李御寧著の指摘した自然への向き合い方について実感としてはわかるが、今後の課題として実際、どこまで検証できるのかを考えるべきことが指摘された。また庭園について東アジア的視点で果樹園・菜園から鑑賞のための庭園へと発展するという流れのなかでみることの提案もあった。さらに全体を通して、中国や韓国の知識人には「玩物喪志」を忌む思想性があるのに対して、日本では「志」「実」をどこまで重んじたのかという問題提起もあった。朝鮮通信使と日本の文人が自国の金剛山・富士山をどう称揚したかについての論文を例に、思想性が視覚的な美か、自然をめぐる評価の観点の違いについても朱子学の影響論で片付けることなく考えるべきだという提言である。

田中優子氏（法政大学）は、李御寧著、鄭氏の発表のまとめをうけ、自然を取りこむのか（日）・自然の側へ出かけていくのか（朝）という違いは今日の全体に関わる視角としてその重要性を強調された。日本では芝居町が人工的に作り込まれ、園芸が本草という実用から独立し美的な面に特化したこともこれと通底する問題として指摘された。市場については、空間を文字で表す『文選』都市賦から今日俎上に載せた『京都雑誌』、また『江戸繁昌記』に至る系統と、モノをリス

ト化して行く『本朝食鑑』などの図鑑類の系統が、両者とも中国に由来して行われ続け、絵画でも都市図と、各地を名所として要素化するものがあり、それぞれにおいて比較文化史が可能となるという指摘がなされた。さらに文化や生活の「治め方」について、根本に儒教的思想があるというだけで終わらせることなく、それぞれがどんな手際で価値観を変容しつつ世を治めたかを考える必要性を唱え、本日の結びとされた。

最後に、企画者として、未筆ながら、すべての登壇者はもとより、秦京煥『朝鮮の雑誌—18～19世紀ソウル両班の趣向』（素々の本 2018年）をご推薦くださった鄭炳説氏（ソウル大学校）、また本企画を歓迎してくださった原著者の秦京煥氏に心よりの感謝を表したい。

（小林ふみ子）

法政大学
江戸東京研究センター・国際日本学研究所共催シンポジウム
漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし

【開催日時】
2021年2月20日(土)
13時～18時 (オンライン・Zoom)

【事前申込要】
2月18日(木)16時まで
参加申込時に登録されたメールアドレスに招待状をお送りします。

13:00	開会説明 小林ふみ子(法政大学)
13:10-14:00	19世紀の江戸と漢陽における舞妓と舞妓の鑑賞 —「漢書と語り、そして芝居」の章から 土田俊子(筑波大学) ディスカッション 山崎香子(法政大学)
14:10-15:00	18-19世紀の漢陽と江戸の作風、その中を覗いてみる —「書翰にはあらずる書べ物と評歌謡、そして語り」の章から 横山由子(法政大学) ディスカッション 田中優子(法政大学)
15:10-16:00	舞妓文化では舞妓と漢陽と江戸—「花を舞で、茶を舞で」の章から 田中優子(法政大学) ディスカッション 横山由子(法政大学)
16:10-17:00	江戸、漢陽にみる花見と漢陽—「花見はここぞ」の章から 田中優子(法政大学) ディスカッション 横山由子(法政大学)
17:10-18:00	総合討論 司会 小林ふみ子 参加者 田中優子(法政大学) 田中優子(法政大学)

法政大学 HOKUSEI UNIVERSITY ETOs 江戸東京研究センター Edo-Tokyo Studies HJOS 国際日本学研究所 International Institute of Japanese Studies

【お問い合わせ先】
100-8100 東京都千代田区文京1-17-1
Email: eto@hokusei-gu.ac.jp

研究会

「江戸東京アトラス研究ワークショップ」

開催日:2021年2月28日

開催方法:オンライン開催

「江戸東京アトラス」プロジェクトでは「名所の変遷から江戸東京の基層を探る」をテーマとし、デザイン工学部の福井恒明教授と文学部の米家志乃布教授の研究室協働による江戸東京アトラスの作成を行っています。昨年度までは、「江戸東京の「ユニークさ」」プロジェクトの活動の一環として行っていましたが、2020年度より独立したプロジェクトとして活動しています。2020年11月25日には途中経過の打ち合わせ会を少人数によるリモートと対面の組み合わせを用いて行いましたが、年度末に開催した本ワークショップはコロナ禍による緊急事態宣言下でのフルリモート開催となりました。

高村雅彦教授(本研究センター長)による開会の挨拶のあと、まずプロジェクトリーダーの福井教授より本プロジェクトの趣旨、本日のワークショップに至るまでの経過報告についての説明がありました。今年度はほぼリモートでの作業になっていることも報告されました。次に、米家教授による『名所江戸百景』(以下、『江戸百』)と『新撰東京名所図会』(以下、『新撰』)の2つのコンテンツの資料解題が続きました。そこでは、各資料の概要と研究目的、それに基づいた主題図の作成方法が説明されました。

ワークショップの発表のメインは、2つの学生グループによるそれぞれのコンテンツに関する作業経過報告です。最初は、デザイン工学部景観研究室のメンバーによる発表が行われました。「名所江戸百景にみる江戸の周縁領域」と題し、『江戸百』に描かれた江戸の領域の推定を行い、それを地図化する試みです。

従来の研究では、浮世絵のなかの山や河川、橋などの「図」的な地物の言及にとどまっていたが、本報告で注目したものは「地」的な風景でした。具体的には、119枚の浮世絵のなかから周縁部を描いたサンプル23枚を選び、農地、広野や森林など今まで広重の『江戸百』研究では注目されなかったの、中景にあたる部分が、実際にどの対象を描いているのかを地図上で特定する作業を行い、それを地図化していく作業です。

ワークショップ当日は、作業結果の一例として「目黒新富士」の中景における建物や森林の位置、視野角や領域の特定が行われ、そのデータをもとにGISで地図化されたものが提示されました。また、23枚すべてにわたって推定した領域を色

分けして地図上にのせて表現した図、さらに視点場・視対象のプロット図も紹介されました。

この作業を踏まえて、江戸全体の空間認識構造が、江戸中心部と墨引・朱引周辺部と周縁部の3層構造になっていることも地図上に表現されました。さらに江戸周縁部への認識距離を示した地図、富士山や筑波山など遠景の認識を示した地図も提示されました。今回は主に周縁部を描いた浮世絵を選びましたが、今後は江戸中心部を視点場とするものも分析に加え、これらの主題図を完成させていくことが課題となるでしょう。



次に、文学部地理学科3年生グループによる「新撰東京名所図会にみる『新景』東京と『旧観』江戸」という発表が行われました。『新撰』に取り上げられた東京市15区における名所をプロットし、その分類や画像の特徴を地図化する試みです。まず名所の分類を行い、大分類別にその分布と特徴を示しました。作業は、まず名所を焼く150種類ほどの小分類にわけ、そのあと6つの分類に分けます。大分類は「天皇・華族」「官」「民」「構造物・公共空間」「地形・自然」「江戸」です。



この分類別の名所分布で東京市15区全体におけるそれぞれの傾向を把握しました。

次に掲載されている画像種類別に名所の分布を示しました。画像種類は、江戸名所図会の挿絵、山本松谷による石版画、写真の3種類です。また、これら3つの画像が揃った名所は13か所あり、そのうちの4か所(市ヶ谷八幡宮・浅草広小路・護国寺・神田神社)が事例として紹介されました。これにより、『新撰』において「新景」東京と「旧観」江戸が視覚的に大きな効果をもって表現されていることがよくわかります。

最後にモダニティ表象としての東京名所の例として、学校・路面電車・橋・洋風建築が事例として取り上げられました。特に学校に関しては、東京市15区において名所として取り上げられている学校を公立・私立、小中高で分類し、学校分類のパイチャート図で地図表現しました。このように、『新撰』に掲載された名所別に主題図を作成していき、地域的な特徴を考察することも今後の作業課題としてあげられます。

東京名所全体の分布としては、どこかの地域に大きな偏りや集中があるというよりは、様々な名所が混在しているという特徴です。ただし、名所分類で見るとおおよその傾向はあり、多様性が特徴と言いつつもモザイク的な分布を示しています。この要因としては、歴史的な地域性との関連で述べるができるといえるでしょう。今回対象とした東京市15区だけでなく、その近郊や公園の部などのデータも付け加えて、さらにアトラスのための主題図作成について考えていく必要があります。

以上、2つの学生グループの作業報告をもとに、ディスカッションの論点は多岐にわたりました。『江戸百』『新撰』それぞれのコンテンツの内容に関わる点、「江戸東京」として共通の問題となる点、地図表現に関わる改善点、デジタルアトラスとしての課題など、活発な意見交換がなされました。最後は、本プロジェクトのスーパーバイザーでもある法政大学総長の田中優子教授による「まとめ」で、ワークショップは閉会しました。ワークショップ終了後も、Zoom上では教員と学生達の雑談が続き、全体を通して、和気あいあいとした楽しい会だったと思います。

今回は、「江戸東京アトラス」プロジェクトのワークショップではあるものの、その枠組みを大きく超えて、江戸東京をどのよ

うな切り口で考えるのか、名所を通した江戸東京の構造とは何か、地図をプラットフォームとした江戸東京研究の新しい方向性にまで議論が展開しました。対面での開催ができず、ワークショップならではの現場でやりとりする高揚感が体験できないのではないかと、という大きな不安はありました。しかし、Zoom会議でも十分な成果を得られたこと、そして、このようにざっくばらんに皆でディスカッションする場が重要であることを改めて認識した機会でもありました。

参加者は、総長やセンター長をはじめ学内の兼任研究員10名、大学院生9名、学部生8名、事務局1名の合計28名でした。参加者の皆様には、日曜日にもかかわらずZoom会議にご参加いただきまして、大変多くの成果を得ることができました。前向きで有益なアドバイスをいただきました教員の皆様、そしてリモート中心での困難な作業やワークショップ準備、当日の運営に参加して下さった学生・院生の皆様に心より感謝いたします。

(米家志乃布)

江戸東京アトラスプロジェクト としての取り組み

- テーマ「名所の変遷から江戸東京の基層を探る」
- EToSの分野横断性を活かす
文献史学/人文地理学/都市史/デザイン
地図を共通プラットフォームとして語る 地図表現して見えてくるものはかなり多い
- 名所本
 - 江戸名所図会 (齊藤月岑 長谷川雪旦 画, 1834-6)
 - 名所江戸百景 (歌川広重 1856-8)
 - 新撰東京名所図会 (風俗画報臨時増刊 M29-44 (1896-1911)) 2020年度の中心作業
 - 偉人の俤 (二六新報社, S3 (1928))

趣旨説明 (福井恒明) より

課外教養プログラム

「先人は凄かった!総長と学ぶ江戸ロジ」

開催日:2020年11月17日

場所:法政大学市ヶ谷キャンパス

11月17日(火)、課外教養プログラム「先人は凄かった!総長と学ぶ江戸ロジ」を実施しました。

このプログラムは現代の環境問題について、江戸時代の環境へ取り組みから解決策を考える企画です。講師の田中優子総長に江戸時代の人の取り組みを紹介していただきました。また、このプログラムは大学の教室で行われました。今年は多くの授業がオンラインになり、学生はキャンパスに足を運ぶ機会が減りました。その中でも対面授業ならではの雰囲気を感じてもらうために、検温や手指の消毒はもちろん、ビニール手袋やフェイスシールドを使ってカルタ形式のワークも実施し、対面でしかできない企画になりました。

当プログラムは、はじめに、江戸時代にはどのように循環されていたのか、人々のものを大切にしている価値観について講義していただきました。着物の洗いはぎの話や行灯の話を通して、江戸時代の人々を取り巻く環境・社会についての理解が深まりました。

プログラムの中盤、学生スタッフが現代の環境問題についての取り組みや課題について紹介し、それに対する詳しい解説を総長にお話していただきました。江戸時代と比較しながら現代の環境問題への取り組みを理解することができました。プログラムの終盤では、ディスカッション形式で講義の内容を踏まえて現代の環境問題への対策を議論し発表しました。どのグループもユニークなアイデアを出しており、学んだことを生かしていました。それに対して総長から丁寧なコメントをいただき、各々の意見について深く考えることができました。

コロナ禍で学生生活も変わり、多くの学生が先の分からない不安に苛まれています。その中でも自分たちの生活をより良くしたいという向上心のもと、環境問題にも目を向け、自分のできることから取り組んでいただければ幸いです。

吉村秀斗(法学部政治学科2年)



上：かかるの様子。コロナ対策を万全に行いました。
中上：各グループでゴミを減らすにはどのような取り組みをすれば良いか?について考えました。
中下：グループワークの後には総長からフィードバックを頂きました。
下：集合写真。学生達にとって貴重な経験になりました。

講義

「東京MAP」の作成

江戸東京研究センター(EToS)のブランディング事業は、個々人の研究の推進や外部との連携だけでなく、学生を中心とする学内への周知とその魅力的な世界への誘導、いわゆるインナーブランディングが欠かせない。このことは、将来の江戸東京に関わる研究者や社会人の育成という意味でも重要なミッションである。そこで、デザイン工学部では、学部2年生が主体となり、修士課程の大学院生がアドバイザーとなりながら、自分たちの視点で、「新しい東京の地図」をつくるという演習の講義を行っている。

東京を歩けば、個々の場所の独自性が実に多様であることがわかる。しかしながら、自分自身が物を見て判断するための「モノサシ」を各自がもっていなければ、何を見て、どのように評価するのかがわからない。この講義では、東京をテーマに、自分自身が興味をもったまちや建築、地域、空間を選び出し、その特徴を読み解いて、それをマップ化することにより、その「モノサシ」を各自が身に付けることを目的としている。同時に、東京のさまざまな地域の多様な資産を掘り起こし、そこに光を当てて価値付けて提示する作業でもある。作品の詳細はホームページをご覧ください。

(高村雅彦)

プロジェクト

「東京発掘プロジェクト 水辺編」

デザイン工学研究科建築学専攻の院生を中心に、東京の水辺を対象に、その土地や建築、人々の営みを歴史的に解説し、その価値を発掘して、そこからさらに水とまち、人の関係を復元しながら新たなデザインの提示に至るまでを目指したプロジェクトを実施し、毎年報告書を発行している。テーマの発想やプロジェクトの推進は、東京スリパチ学会会長の皆川典久氏が中心的に担い、当センターにとって強力なサポートを得ることができている。

(高村雅彦、皆川典久)

講義

「フィールドワーク」

本講義は、学生を中心とする学内のブランディング事業、つまりインナーブランディングの活動である。デザイン工学部建築学科では、学部3年生に演習講義名「フィールドワーク(建築)」を設けている。学生たちが主体的に東京のまちに出て、おもしろそうなもの、価値のありそうなものを見つけ出し、実際のフィールドを通して都市や建築の歴史を考えていくのである。具体的には、地図やさまざまな史料を使いながら歴史的なまちの分析、あるいは住宅などの建物の実測調査と作図を行う。こうした作業を通じて、単に分析方法や実測の知識を身に付けるだけでなく、都市や建築の歴史的価値を見出し、その保存や再生がいかに創造的な行為であるかを理解することが目的となる。その詳細は、ホームページをご覧ください。

(高村雅彦、高道昌志)

講義

「都市史」

江戸東京研究センター(EToS)におけるインナーブランディングを推進するために、東京のまちを対象に、街区、敷地、建築レベルで、江戸から明治、現代に沿ってその空間の変化を各時代の地図から考察する講義「都市史」を設けた。今、歴史的な都市や建築の多様な対象にあって、現代都市との関係をいかに解説し再構築するかが求められている。本講義では、デザイン工学部建築学科の学部3年生が主体となり、修士課程の大学院生がアドバイザーとなって、興味のある場所を自分たちで設定する。建築と都市の歴史の相互の関係を読み解く方法を身に付け、地図作業と実際のフィールドを方法として、その特質を表現する過程と技術を習得しながら、東京の新たな姿を創造するための基盤となる作業である。作品の詳細は、ホームページをご覧ください。

(高村雅彦)

著書・報告書

EToS 著書

書名：[EToS叢書2]『風土(Fudo)から江戸東京へ』

著者名：安孫子信(監修)

出版社：法政大学出版局

発行年月：2020年3月

論文標題：「序—なぜ風土(Fudo)なのか」

著者名：安孫子信

論文標題：「和辻哲郎にとっての東京—田舎あるいは古代という対立軸から」

著者名：衣笠正晃

論文標題：「文化的景観と風土、その担い手」

著者名：福井恒明

論文標題：「水性の東京—映画に対する風土学の試み」

著者名：クレリア・ゼルニック／岡村民夫訳

論文標題：「総括—風土(Fudo)と「珍しさ」の諸相」

著者名：陣内秀信

書名：『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』

編者名：小林ふみ子、中丸宣明(編)

出版社：文学通信

発行年月：2020年6月

論文標題：「江戸の歴史のたどり方—考証の先達、瀬名貞雄・大久保忠寄と大田南畝」

著者名：小林ふみ子

論文標題：「風俗を記録する意図—雑芸能者たちの〈江戸〉」

著者名：小林ふみ子

論文標題：「受け継がれた江戸—高島藍泉の考証随筆」

著者名：中丸宣明

論文標題：「あとがき」

著者名：中丸宣明

EToS 報告書

報告書名：[EToS報告書6]「テクノロジーと東京」

編者名：山本真鳥

出版社：法政大学江戸東京研究センター

発行年月：2020年3月

論文標題：「交通体系の変化と東京の都市構造の変容」

著者名：陣内秀信

論文標題：「効率の最大化によって変質する都市空間」

著者名：岩佐明彦

論文標題：「やわらかい都市のテクノロジー」

著者名：北山恒

論文標題：「失われた場所、失われた時間」

著者名：高村雅彦

報告書名：シンポジウム「地域から外濠の再生を考える」

著者名：外濠再生懇談会、法政大学江戸東京研究センター、法政大学エコ地域デザイン研究センター、東京理科大学外濠および神楽坂地域調査研究推進室

発行年月：2020年3月

標題・発表者名：「趣旨説明」陣内秀信

標題・発表者名：「外濠文化の可能性」田中優子

標題・発表者名：「外濠再生憲章について」福井恒明

資料標題：「都知事への提言実施と東京都「未来の東京」戦略ビジョンへの反映」

資料標題：「外濠・日本橋川の水質浄化と玉川上水・分水網の保全再生について(提言)」

報告書名：[EToS報告書]「東京発掘プロジェクト 水辺編II」

監修：高村雅彦・皆川典久

出版社：法政大学江戸東京研究センター

発行年月：2020年4月

報告書名：[EToS制作物]「水都江戸の基層・中世武蔵国絵図」

著者名：江戸東京研究センター「水都—基層構造」プロジェクトチーム・神谷博

出版社：法政大学江戸東京研究センター

発行年月：2020年7月

著書

書名：『江戸とアバター 私たちの内なるダイバーシティ』

著者名：田中優子、池上英子

出版社：朝日新聞出版

発行年月：2020年3月

書名：『日本思想史事典』

著者名：小林ふみ子(項目執筆)

標題：「戯作の世界」

発行：丸善出版

発行年月：2020年4月

書名：『イタリアの中世都市—アゾロの都市から領域まで』伊藤毅(編)

著者名：陣内秀信(分担執筆)

論文表題：「ヴェネト州の都市と地域の空間構造—地形と河川からの視点を中心として」

出版社：鹿島出版会

発行年月：2020年4月

書名：『島原よろずまち湧水散策』

著者名：島原中心市街地街づくり推進協議会

図面・資料・文章提供：高村雅彦

出版社：島原中心市街地街づくり推進協議会

発行年月：2020年5月

書名：『奇跡の住宅 旧渡辺甚吉邸と室内装飾』

著者名：栗生はるか、金谷匡高、他(共著)旧渡辺甚吉邸サポーターズ(監修)

出版社：LIXIL出版

発行年月：2020年6月

書名：『現代フランス哲学入門』川口茂雄・越門勝彦・三宅岳史(編)

著者名：安孫子信(分担執筆)

出版社：ミネルヴァ書房

発行年月：2020年7月

書名:『水都東京一地形と歴史から読みとく下町・山の手・郊外』
著者名:陣内秀信
出版社:筑摩書房
発行年月:2020年10月

書名:『苦海・浄土・日本 石牟礼道子 もだえ神の精神』
著者名:田中優子
出版社:集英社
発行年月:2020年12月

書名:『宮沢賢治論 心象の大地へ』
著者名:岡村民夫
出版社:七月社
発行年月:2020年12月

書名:『江戸問答』
著者名:田中優子・松岡正剛
出版社:岩波書店
発行年月:2021年1月

書名:『都市科学事典』
著者名:北山恒(分担執筆)
出版社:春風社
発行年月:2021年2月

書名:『国絵図読解事典』小野寺淳、平井松午(編)
著者名:米家志乃布(分担執筆)
論文表題:「22 蝦夷地像の変遷と蝦夷図」
出版社:創元社
発行年月:2021年2月

論文・学会発表・作品

論文

論文標題:「フォーラム 近代の名所図会にみる江戸イメージ」
著者名:米家 志乃布
雑誌名:法政地理 (52), 109-124
発行年月:2020年3月

論文標題:「江戸町方における火の見櫓の建設と御鷹御用一牛込揚場町を事例として」
著者名:根崎光男
雑誌名:人間環境論集 第20巻第2号
発表年月:2020年3月23日

論文標題:「置屋根が冬の室内環境に与える影響について」
著者名:金田正夫・出口清孝
雑誌名:民俗建築 第157号
発表年月:2020年5月30日

論文標題:「街づくり、景観と都市デザイン」
著者名:高見公雄
雑誌名:新都市 令和2年6月号
発表年月:2020年6月

論文標題:「分散型仮設団地と被災者の継続居住—熊本県嘉島町をケーススタディとして」
著者名:富安亮輔, 岩佐明彦
雑誌名:日本建築学会技術報告集 第63号
発表年月:2020年6月

論文標題:「横浜都市デザイン概観」
著者名:北山恒
雑誌名:都市美第2巻
発表年月:2020年6月

論文標題:「竜と詩人」小論—詩から「設計」への転回を海蝕洞窟に見る」
著者名:岡村民夫
雑誌名:賢治学 第7輯
発表年月:2020年6月

論文標題:「文京建築会ユースの取り組み」
著者名:栗生はるか
雑誌名:建築士 Vol.69, No. 814
発表年月:2020年7月

論文標題:「戦後住宅クロニクル」
著者名:北山恒
雑誌名:建築ジャーナル No.1306
発表年月:2020年7月

論文標題:「東京2020の「いままで」と「これから」のまちづくり」
著者名:陣内秀信
雑誌名:建築士 Vol.69, No.814
発表年月:2020年7月

論文標題:「徳川御殿の時期区分試論—将軍の鷹狩りを中心に—」
著者名:根崎光男
雑誌名:人間環境論集(法政大学人間環境学会)
巻号:21(1)
発行年月:2020年10月31日

論文標題:「明治以降の近代化に伴う公共空間の変遷—上野公園に関する新聞記事の考察—」
著者名:増田政弘、福井恒明
雑誌名:景観・デザイン研究講演集
巻号:16
発行年月:2020年12月

論文標題:「水害リスク地域における市街地の展開過程とその要因」
著者名:阿部遼磨、福井恒明
雑誌名:景観・デザイン研究講演集
巻号:16
発行年月:2020年12月

論文標題:「千代田区を対象とした古写真のアーカイブ化」
著者名:藤田景、福井恒明
雑誌名:景観・デザイン研究講演集
巻号:16
発行年月:2020年12月

論文標題:「『婦人之友』誌にみる住まい方と価値観の変遷」
著者名:増渕実希、荻原知子、福井恒明
雑誌名:景観・デザイン研究講演集
巻号:16
発行年月:2020年12月

論文標題:「川と地域が一体となったまちづくり推進における かわまちづくり支援制度の寄与」
著者名:堀越義人、福井恒明
雑誌名:第62回土木計画学研究会・講演集(CD-ROM)
巻号:62
発行年月:2020年

論文標題:「観光考古学への期待」
著者名:福井恒明
雑誌名:観光と考古学
巻号:1
発行年月:2020年

論文標題:「四方赤良こと大田南畝判『狂歌角力草』稿本解題・翻刻」
著者名:小林ふみ子
雑誌名:法政大学文学部紀要
巻号:81
発行年月:2020年

査読付論文

論文標題:The locus of my study of Tokyo: From building typology to spatial anthropology and eco-history

著者名:陣内秀信
雑誌名:Japan Architectural Review—International Journal of Japan Architectural Review for Engineering and Design
巻号:Volume3, Issue3
発行年月:2020年7月

論文標題:「鎌倉南北朝期の雲版と禅院・律院」
著者名:大塚 紀弘
雑誌名:日本宗教文化史研究 = The Journal of Japanese religious and cultural history
巻号:24(2)
発行年月:2020年11月

論文標題:「『対話』は事業参加の場—ダム建設事業に見る合意形成の条件—」
著者名:長谷部 俊治
雑誌名:土木学会誌
巻号:Vol.105 No. 3
発行年月:2020年3月

論文標題:The Cartographic Heritage of Tokyo: The Representation of Urban Landscapes on Maps from the Seventeenth to Nineteenth Centuries
著者名:Shinobu Komeie
雑誌名:Journal of Research and Didactics in Geography (Italian Association of Geography Teachers)
巻号:2
発行年月:2020年12月

論文標題:「南畝の狂歌の評価軸」
著者名:小林ふみ子
雑誌名:近世文藝
巻号:113
発行年月:2021年1月

学会発表

発表標題:「広州における建国前後の都市計画と住宅地の変遷—東アジア都市の近現代における住宅地形成と集合住宅に関する研究 その5」
発表者名:邵 帥、高村 雅彦
学会等名:日本建築学会大会学術講演梗概集(関東)
発表場所:オンライン
発表年月:2020年9月

学会発表(招待講演・国際学会)

発表標題:「文京建築会ユースの取り組み」
発表者名:栗生はるか
学会等名:日本建築士会連合会 第28回まちづくり会議
発表場所:笹川記念会館
発表年月:2020年1月

発表標題:Maintenance and succession of “regional ecosystems”—

examples of public bath, "sento" in Tokyo
発表者名:栗生はるか
学会等名:Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives
発表場所:Ca' Foscari University of Venice
発表年月:2020年1月

発表表題:Descriptions forming Memories : The History of Geographic Records of Edo-Tokyo and water
発表者名:小林ふみ子
学会等名:Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives
発表場所:Ca' Foscari University of Venice
発表年月:2020年1月

発表表題:Mapping Tokyo: Cartography and the Representation of the Capital of Japan in the 20th Century
発表者名:米家志乃布
学会等名:Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives
発表場所:Ca' Foscari University of Venice
発表年月:2020年1月

発表表題:Process of Regeneration of Water City in Tokyo and its Future Vision
発表者名:陣内秀信
学会等名:Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives
発表場所:Ca' Foscari University of Venice
発表年月:2020年1月

発表表題:Appropriate Range of the City in Edo-Tokyo provided by the Historical Sacred Place of the Water
発表者名:高村雅彦
学会等名:Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives
発表場所:Ca' Foscari University of Venice
発表年月:2020年1月

発表表題:Waterside Culture in Edo(江戸の水辺文化)
発表者名:田中優子
学会等名:Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives
発表場所:Ca' Foscari University of Venice
発表年月:2020年1月

発表表題:Attempt of conservation and restoration of cultural landscape in Tokyo - Case of Edo castle outer moats and Katsushika-Shibamata temple town
発表者名:福井恒明
学会等名:Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives
発表場所:Ca' Foscari University of Venice
発表年月:2020年1月

発表表題:The Beginning and the Present Condition of Collective Housing in Tokyo: Center-Periphery, Inland-Waterfront
発表者名:渡辺真理+木下庸子
学会等名:Tokyo and Venice as Cities on Water :Past Memories and Future Perspectives.
発表場所:Ca' Foscari University of Venice
発表年月:2020年1月

発表表題:「将軍の鷹狩と御殿」
発表者名:根崎光男
学会等名:江戸遺跡研究会第32回大会・徳川御殿の考古学
発表場所:駒沢大学駒沢キャンパス2号館
発表年月:2020年2月

発表表題:「徳川将軍の鷹狩りと鷹場」
発表者名:根崎光男
学会等名:第3回東アジア都市史学会学術大会法政大学(オンライン開催)
発表年月:2020年10月17日

発表表題:「水都東京—<水>から読みとく都市・自然・人間のむすびつき」
発表者名:陣内秀信
学会等名:第三回東アジア都市史学会学術大会
発表年月:2020年10月

発表表題:「東京に秘められた水都としての可能性」
発表者名:陣内秀信
学会等名:江戸東京歴史文化ルネサンス設立3周年記念シンポジウム
発表年月:2020年10月
発表表題:「都市の歴史と保存活用の考え方—日本とアジアを例に—」
発表者名:高村 雅彦
学会等名:飯田アカデミア(飯田市歴史研究所)
発表場所:オンライン開催
発表年月:2020年10月

発表表題:The Mediator of "immigration citizens": A study on the history of Asian modern cities and architecture from the viewpoint of the Resident-style immigration
発表者名:BAO Muping, TAKAMURA Masahiko
学会等名:The 3rd international conference of the East-Asian Society for Urban History(オンライン開催)
発表年月:2020年10月17日

発表表題:「大衆化のなかの国文学／国文学界——戦前・戦後の連続性から考える」
発表者名:衣笠正晃
学会等名:昭和文学会秋季大会(オンライン開催)
発表年月:2020年11月7日

発表表題:Riquilificazione e rivitalizzazione dei centri storici e territori storici negli anni recenti in Giappone
発表者:Hidenobu Jinnai
学会等名:Convegno internazionale di ANCSA (イタリア/全国歴史芸術都市保存協会の創立60周年記念大会) Italy/ Gubbio(オンライン開催)
発表年月:2020年12月

発表標題: I ventennali risultati di un progetto di ricerca :dal centro storico di Amalfi alla Costiera Amalfitana
発表者: Hidenobu Jinnai
学会等名: Convegno di studi: Le 'Città dell'acqua' sulle Coste d' Amalfi e Venezia. Valori, immagine, progetto, Amalfi.
発表年月: 2020年12月

著作について書かれた書評

評者名: 岩田秀行
媒体名: 日本文学誌要
書評掲載年月: 2020年3月
対象著書(著者): 『へんちくりん江戸挿絵本』(小林ふみ子、集英社インターナショナル、2019年3月)

評者名: 高道昌志
媒体名: 白山史学 (56)
書評掲載年月: 2020年3月
対象著書(著者): 『江戸の都市化と公共空間』(松本剣志郎、塙書房、2019年2月)

評者名: 角和裕子
媒体名: 日本歴史 (863)
書評掲載年月: 2020年4月
対象著書(著者): 『江戸の都市化と公共空間』(松本剣志郎、塙書房、2019年2月)

評者名: 渡辺浩一
媒体名: 歴史評論 = Historical journal (844)
書評掲載年月: 2020年8月
対象著書(著者): 『江戸の都市化と公共空間』(松本剣志郎、塙書房、2019年2月)

評者名: 助川幸逸郎
媒体名: 図書新聞
書評掲載年月: 2020年10月17日
対象著書(著者): 『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』(法政大学江戸東京センター・小林ふみ子・中丸宣明編、文学通信、2020年6月)

評者名: 松原隆一郎
媒体名: 毎日新聞
書評掲載年月: 2020年11月14日
対象著書(著者): 『水都東京一地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』(陣内秀信、筑摩書房、2020年11月)

評者名: 橋爪紳也
媒体名: 日本経済新聞
書評掲載年月: 2020年11月28日
対象著書(著者): 『水都東京一地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』(陣内秀信、筑摩書房、2020年11月)

評者名: 佐藤信
媒体名: 読売新聞
書評掲載年月: 2020年12月6日

対象著書(著者): 『水都東京一地形と歴史で読み解く下町・山の手・郊外』(陣内秀信、筑摩書房、2020年11月)

評者名: 板坂則子
媒体名: 浮世絵芸術 (181)
書評掲載年月: 2021年1月
対象著書(著者): 『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』(法政大学江戸東京センター・小林ふみ子・中丸宣明(編)、文学通信、2020年6月)

作品

作品名: K2 house
著者名: 下吹越武人
賞: 住まいの環境デザイン・アワード2020 グランプリ
受賞日: 2020年2月

作品名: K2 House
著者名: 下吹越武人
雑誌名: 新建築 2020年2月号
発行年月: 2020年2月

作品名: K2 House
著者名: 下吹越武人
雑誌名: エル・デコ 4月号
発行年月: 2020年2月

作品名: K2 house
著者名: 下吹越武人
賞: 日本建築学会作品選集2020
発行日: 2020年3月

作品名: K2 house
著者名: 下吹越武人
賞: 日本建築学会作品選奨
受賞日: 2020年4月

作品名: K2 House
著者名: 下吹越武人
雑誌名: モダンリビング No.250
発行年月: 2020年4月

作品名: 中央ラインハウス小金井
著者名: 北山恒(設計)
雑誌名: 日経アーキテクチャ 2020年7月号、pp66-72
発行年月: 2020年8月

作品名: 中央ラインハウス小金井
著者名: 北山恒(設計)
雑誌名: 「新建築」、2020年8月号
発行年月: 2020年8月

その他

その他

標題:「函館港の現在と過去」(総特集 北前船日和山之景)
著者名:米家志乃布
雑誌名:『地図中心』(571)
発行年月:2020年4月

標題:「渋谷問題」
著者名:北山恒
媒体名:建築時評コラム 驟雨異論
発行年月:2020年4月

標題:「追悼 芳賀徹:「徳川時代」と都市・東京に注いだ国際的で開かれた視線」
著者名:陣内秀信
雑誌名:『東京人』2020年5月号
発行年月:2020年5月

標題:「未来に向けた新たな住まい方」
著者名:陣内秀信
雑誌名:『建築東京』Vol.56, No.668
発行年月:2020年6月

標題:「未来都市はムラに近似する」
著者名:北山恒
媒体名:建築時評コラム 驟雨異論
発行年月:2020年7月20日

出演者:金谷匡高他
媒体名:NHK「おはよう日本」TV
発表年月:2020年9月8日

標題:特集「台風15号から1年 島の文化を守りたい」
内容:新島の歴史的な建物群や景観をどのように残し後世に伝えていくか

出演者:金谷匡高他
媒体名:NHK「ちかさとナビ」ウェブサイト
発表年月:2020年9月8日

標題:「台風15号(2019年)被害の新島 石造りの街並みを修復」
URL:<https://www.nhk.or.jp/shutoken/ohayo/20200908.html>

標題:「クリストファー・アレグザンダーの「人間都市」(a human city)を知っているか」
著者名:北山恒
媒体名:建築時評コラム 驟雨異論
発行年月:2020年10月20日

発表者:田中優子
標題:基調講演「コロナで発見した5つのこと」
発表場所:「朝日教育会議「これからの大学 for ダイバーシティ ～多読・会読・連読の場～」
媒体名:朝日新聞社・法政大学
発表年月:2021年11月22日

発表者名:横山泰子
学会等名:東京文化資源会議「崖東夜話」

発表年月:2020年10月13日

著者名:小林ふみ子
標題:「嘉永3年(1850)刊遠山雲如『墨水四時雑詠』注解」(分担執筆)
雑誌名:『太平余興』7集
発表年月:2020年11月

著者名:小林ふみ子
標題:「『墨水四時雑詠』注解第三回 停雲会(本回担当:杉下元明・日原傳・小林ふみ子・堀口育男・佐藤温)」
媒体名:『太平余興』6集
発行年月:2020年

著者名:山本真鳥
媒体名:弘文堂ウェブマガジン「オセアニアの今ー伝統文化とグローバル化」
発行年月:2019年から現在
URL:<https://oceania.hatenablog.jp/>

書評

評者名:大塚紀弘
雑誌名:日本歴史 (861)
発表年月:2020年2月
対象書籍:稲葉伸道『日本中世の王朝・幕府と寺社』

評者名:大塚紀弘
雑誌名:史学雑誌 129(6)
発表年月:2020年6月
対象書籍:松尾剛次『鎌倉新仏教論と叡尊教団』

評者名:小林ふみ子
雑誌名:『国語と国文学』97巻11号
発表年月:2020年11月
対象書籍:岩田秀行『江戸芸文攷:黄表紙・浮世絵・江戸俳諧』

メディア掲載

記事標題:「怪談新聞 江戸に響く恨めしや～」
媒体名:東京新聞
発行年月:2020年8月18日
内容:横山泰子教授(前・センター長)が取材協力

記事標題:「鼎談 蘇る水都の記憶と武蔵野の杜」
(特集「四谷」都心の大規模再開発 新時代の幕開け!)
媒体名:『東京人』2020年12月号
発行年月:2020年11月
内容:陣内秀信特任教授が鼎談に参加

記事標題:「漢陽と江戸 それぞれの生活文化 オンラインでシンポジウム開催」
媒体名:統一日報
発行年月:2021年2月25日
内容:2021年2月20日開催のシンポジウム「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」取材記事

江戸東京研究センター長

高村 雅彦(タカムラ マサヒコ) 教授 デザイン工学部建築学科

研究プロジェクト・リーダー

水都一基層構造
高村 雅彦(タカムラ マサヒコ) 教授 デザイン工学部建築学科江戸東京の「ユニーク」さ
小林 ふみ子(コバヤシ フミコ) 教授 文学部日本文学科テクノロジーとアート
山本 真鳥(ヤマモト マトリ) 教授 経済学部経済学科都市東京の近未来
北山 恒(キタヤマ コウ) 教授 デザイン工学部建築学科江戸東京アトラス
福井 恒明(フクイ ツネアキ) 教授 デザイン工学部
都市環境デザイン工学科

特任研究員

陣内 秀信(ジンナイ ヒデノブ) 法政大学 名誉教授・特任教授

兼任研究員

赤松 佳珠子(アカマツ カズコ) 教授 デザイン工学部建築学科
安孫子 信(アビコ シン) 教授 文学部哲学科
岩佐 明彦(イワサ アキヒコ) 教授 デザイン工学部建築学科
大塚 紀弘(オオツカ ノリヒロ) 准教授 文学部史学科
岡村 民夫(オカムラ タミオ) 教授 国際文化学部国際文化学科
小口 雅史(オグチ マサシ) 教授 文学部史学科
金谷 匡高(カナヤ マサタカ) 教務助手 デザイン工学部建築学科
川久保 俊(カワクボ シュン) 准教授 デザイン工学部建築学科
衣笠 正晃(キヌガサ マサアキ) 教授 国際文化学部国際文化学科
米家 志乃布(コメイエ シノブ) 教授 文学部地理学科
下吹越 武人(シモヒゴシ タケト) 教授 デザイン工学部建築学科
曾 士才(ソウ シサイ) 教授 国際文化学部国際文化学科
高見 公雄(タカミ キミオ) 教授 デザイン工学部
都市環境デザイン工学科
田中 優子(タナカ ユウコ) 教授 総長
社会学部メディア社会学科
出口 清孝(デグチ キヨタカ) 教授 デザイン工学部建築学科
中丸 宣明(ナカマル ノブアキ) 教授 文学部日本文学科
根崎 光男(ネサキ ミツオ) 教授 人間環境学部人間環境学科
長谷部 俊治(ハセベトシハル) 教授 社会学部社会政策科学科
松本 剣志郎(マツモト ケンシロウ) 准教授 文学部史学科
横山 泰子(ヨコヤマ ヤスコ) 教授 理工学部創生科学科
渡邊 真理(ワタナベ マコト) 教授 デザイン工学部建築学科

客員研究員

石神 隆(イシガミ タカシ) 法政大学名誉教授, エコ地域デザイン研究センター客員研究員

石渡 雄士(イシワタ ユウシ) 国立研究開発法人建築研究所戦略的研究推進室専門研究員, エコ地域デザイン研究センター客員研究員

稲益 祐太(イナマス ユウタ) 久留米工業大学特任講師, 法政大学デザイン工学部兼任講師, エコ地域デザイン研究センター客員研究員

犬塚 悠(イヌツカ ユウ) 名古屋工業大学大学院工学研究科准教授

大野 秀敏(オオノ ヒデトシ) 建築家、東京大学名誉教授, 立命館大学客員教授 法政大学デザイン工学部建築学科客員教授

織山 和久(オリヤマ カズヒサ) 広島県立大学経営管理研究科(HMBS)非常勤講師, 株式会社アーキネット代表

CAROLI Rosa(カーロリ ローザ) ヴェネツィア カ・フォスカリ大学言語学・比較文化研究学教授

神谷 博(カミヤ ヒロシ) 特定非営利活動法人雨水まちづくりサポート理事長, エコ地域デザイン研究センター客員研究員

川添 裕(カワゾエ ユウ) 横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授

川田 順造(カワダ ジュンゾウ) 神奈川大学特別招聘教授

河野 哲也(コウノ テツヤ) 立教大学文学部教育学科教授

齋藤 智志(サイトウ サトシ) 秋山庄太郎写真芸術館 主任学芸員

山道 拓人(サンドウ タクト) 建築家, 法政大学兼任講師

白石 さや(シライシ サヤ) 東京大学名誉教授(東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター協力研究員)

鈴木 裕輔(スズムラ ユウスケ) 名城大学外国語学部准教授

高道 昌志(タカミチ マサシ) 首都大学東京助教, エコ地域デザイン研究センター客員研究員

仲 俊治(ナカトシハル) 建築家, 仲建築設計スタジオ代表, 法政大学兼任講師

星野 勉(ホシノ ツトム) 法政大学名誉教授, 国際日本学研究所客員所員

眞鳥 望(マシマ ノゾム) 名城大学文芸学部非常勤講師

松本 文夫(マツモト フミオ) 東京大学総合研究博物館特任教授

皆川 典久(ミナガワ ノリヒサ) 東京スリバチ学会会長, 鹿島建設株式会社

森田 喬(モリタ タカシ) 法政大学名誉教授, エコ地域デザイン研究センター客員研究員

栗生 はるか(クリユウ ハルカ) せんとうとまち共同代表

リサーチ・アシスタント(R・A)

加藤 智也(カトウトモヤ) デザイン工学研究科建築学専攻博士後期課程
邵 帥(ショウ スイ) デザイン工学研究科建築学専攻博士後期課程
内藤 啓太(ナイトウ ケイタ) デザイン工学研究科建築学専攻博士後期課程
畠山 望美(ハタケヤマ ノゾミ) デザイン工学研究科建築学専攻博士後期課程
肥留川 裕生(ヒルカワ ユウキ) 人文科学研究科史学専攻修士課程修了
羅 莎(ラ サ) 人文科学研究科史学専攻博士後期課程

EToS 法政大学
江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies

法政大学 江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for Edo-Tokyo Studies
<https://edotokyo.hosei.ac.jp>
問い合わせ先: 法政大学 江戸東京研究センター事務局
E-mail edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp TEL 03-3264-9682

発行: 2021年3月30日

